

## 佛教における戦争體驗 (四)

市川白弦

まえがき 「しかし、太平洋戦争で戦死し、戦病死し、戦災死した多くの人がびとには、追放解除の恩典はない……ここには潔白の地がない。私たちは、生きのこつたかぎり、被害者であり、加害者である。」<sup>(鶴見)</sup> 滿洲事變からポツダム宣言受諾にいたる歴史の経験が、日本の佛教者にとつて、すぐれて哲學的・倫理的な事件であることが十分に自覺せられ、われわれの戦争責任を戦後責任としてはたしてゆく過程のなかで、この経験を掘りおこし検討しつづける必要がある。ここを空白のまま素通りすることは正當でない。戦争體驗は、そこから學びとろうとする佛教者にとつて、痛みをとまなつた、くめどもつきぬ泉である。

「大東亜戦争」期における戦争に關連するもの、多少とも時局に關係づけて考えられる要素を含む拙論は、「大慧(昭一六・七)」「清貧について」(二七・七)「戦争・科學・禪」(二七・八一九)「職能の倫理」(二七・一〇)「鬪戰經の哲學」(二八・九)「澤庵和尚の論理と倫理」(二九・二)である。この時期のものが少しいのは、用紙の統制強化のため、各誌が縮小されたこと、わたくし程

度の協力者を諸誌が必要としなくなつたこと、戦局につれてわたくしの事務が加重されたこと、による。もちろん、文筆上の實績だけが、わたくしの戦争責任にかかるのではない。最初わたくしは、自分の經歷を抵抗・動搖・協力の三期に分けたが、いまからみれば、この區別はさほど明確ではないようである。この稿も事實の記述を主眼とし、これの省察は後にゆずる。ただし關係拙論に「般若經」(三一新書)第二・第三章、「挫折と轉向」(續・挫折と轉向)(大乘禪)「絕對無のつまづき」(思想)「現代佛教の自己回復」(思想の科學)「禪・華嚴・アナキズム」(自由思想)「佛教倫理現實化の問題點」(日本佛教學會年報)がある。

### 三 (昭和一九一六—一九三三)

一九四二(昭一六)。一月。陸軍省「戰陣訓」公布。  
「信ハ力ナリ…必勝ノ信念ハ千磨必死ノ訓練ニ生ズ…生死利害ヲ超越シテ、全體ノ爲己ヲ没スルノ覺悟ナカルベ

カラズ：死生ヲ貫クモノハ、崇高ナル獻身奉公ノ精神ナリ。生死ヲ超越シ、一意任務ノ完遂ニ邁進スベシ。身心一切ノ力ヲ盡シ、從容トシテ悠久ノ大義ニ生クルコトヲ悦ビトスベシ。」推薦翼贊選舉法發表。「新聞紙等掲載制限令」公布。食糧増産に青少年學徒總動員通達。朝鮮青年連合會結成(出)。西田幾多郎「歴史哲學ニツイテ」御進講。(1)元旦上堂語「：恭願 皇道六合亘 聖護八紘恢 索語 新體制下衲僧家 背私向公 有 臣道實踐底漢一廢 參。」保田與重郎「天平の精神」(文藝春秋)。高神覺昇「日本精神と佛教」によれば、佛教は國家神道にとつぎ、國體と一つになつた日本佛教である。日本は神佛一體の國柄。ここに智目を開いて、正しく批判し正しく出發せねばならぬ。佛教は神道と共に、日本的にしてかつ世界的(八宇)。日本による世界新秩序建設の足場がここにある。ここでは個と全とは一つであり、一即一切、一切即一の國體曼荼羅にこそ、無我の法に立脚した總親和の世界がある。現代物理学は、相補性の原理(9)によつて、佛教の無我哲學を立證している。すべては相對的存在ではなくて相補的存在であり、そこにもちつもたれつの無盡緣起の法界がある。涅槃經に「信火内ニ燃ユルトキハ、行煙自ラ外ニ現ワル。」という。日本人の信と行とは、國體への仰信と、それに伴う實踐にある。矢はずでに弦を離れた。

「今日の問題は戦いです。明日の問題は勝つことです。すべての日の問題は死ぬことです。」(從容錄提唱)(神保) 如天) はない、「人々具有する日本精神を徹見して、日本臣民たるの眞價を自覺して、其の精神力から、臣道實踐の力となつて現われて來なくてはならない。それには坐禪によつて、身心の鍊成をしなくては駄目だ。：世界の人類が皆鼓腹擊壤して、太平の歌をうたうの時節を最大理想として、新體制に處してゆかねばならぬ。」(4)「華嚴經講話」にいう、「我國の祖神は、一にして多を容れたまう絶對神、：佛も一多即・主伴互融の如來、ここに神佛一致のところがある：皇國日本の八紘一字と華嚴の蓮華藏世界とは、一致性、相似性をもつ：帝國主義にあらざ、一多相即・主伴互融の蓮華藏世界海的八紘一字である。」皇室による佛教の導入と憲法十七條の制定、東大寺大佛殿ないし國分寺、國分尼寺の建立の事實は、右翼・軍部の排佛運動にたいする、日本佛教の自己防衛の主たるよりどころであり、東大寺大佛殿の毘盧舍那佛を、華嚴經の本尊佛とみることによつて、華嚴思想と皇國思想との融和もしくは一致を語ることが、日本佛教の基調となつた。

二月。言論・出版・集會・結社等臨時取締令公布。陸海軍報道部、内務省警保局、懇談會の名において雜誌社

を召集、壓迫し、執筆禁止のリスト内示、それには田中耕太郎、横田喜三郎、矢内原忠雄、馬場恒吾、清澤冽、水野廣徳らが含まれていた。「中公」社長嶋中雄作、彈壓に屈せず。進歩的俳句運動への壓迫始まる。「昇降機しずかに雷の夜を昇る」(西東)は反軍思想をふくむ、と特高警察いう。「秋になつて赤い柿が枝に一つ残つていた、という歌をみつけると、これを追及して行つて、これはいかに彈壓されても、最後に残るのは共產黨だ、ということをやつたものだろうという。菊が枯れてくる」というのはたいへんで、しまいには枯菊などは詠えなくなつた。」(6) 全國にわたつて菊の紋章に似た帽章・校旗などの使用が禁止された。森戸辰男「戦争と文化」、聖戦の目的、戦争の道義性、道徳振興者としての戦争、平和主義の非現實性、新秩序への協力を論じた。「須く釋尊に還るべし」はいう、「柳に入つては緑、花に入つては紅で、日本人は日本人であれ、ということだ。新體制下、一億一心となつて、その職域において臣道實踐あるのみ。如來一實の法に還ることと、職域奉公とは全く一つである。」(7)

三月。國民學校令、(1)皇國民の鍊成 (2)知徳相即・心身一體の修練道場たるべきこと (3)教科書用圖書の徹底的統制。翼賛會改組、副總裁に司法大臣柳川平助中將。

國防保安法、治安維持法改正法公布。柳川法相いう「治安維持の目的を達する爲には、一面共產主義運動のみならず、無政府主義運動、民族獨立又は類似宗教運動等、各種の詭激運動にも亦之を適用する實際上の必要があります。」(二月國會での提案理) 情報局、主要出版社に購讀者カード提出を命じ、全雜誌社に六月以降毎月編集プランと豫定執筆者名、事前提出命令。「改造」「中公」「日本評論」の讀者壓迫。佛教各派十三宗二十七派に合同。「三月初三。暖。午後會て派出婦なりし栃木縣丸々町の女突然尋ね來る。…十日程前東京にかえり、只今は蠲殼町の待合丸々に住込みました。お客筋には、警視廳特高課の重立ちし刑事、又翼賛會の大立物あれば、手入の心配なしと語れり。」(荷風) インド國民會議派の幹部大量逮捕。尾崎秀實「東亞共榮圈の基底に横たわる重要問題」(改) 尾崎は「資本家＝軍部の結びつきが権力の本質的の中核」とみ、「日本の眞實の支配階級たる軍部資本家の勢力が、天皇の名において行動する仕組にどう對處するか」を根本の課題とし、翼賛體制への國民組織を轉じて、日本人民と革命的中國人民との同盟を實現しよう、と構想した。柴野恭堂「達摩」(禪叢書) 伊藤古鑑「臨濟」(同上)。

四月。國民學校令實施、文相橋田邦彦(正法眼藏) 明治

神宮に参拜、この旨を奉告。日ソ中立條約調印。生活必需品物資統制令公布。米の配給通帳制開始(男一人分)。官廳公共團體に鐵銅回收布告。國鐵勞働組合、二十年の歴史をとり國有鐵道奉公會と改稱。宗教團體法公布。これに基いて、各宗の教義改訂。全國一齊に法華宗幹部荻谷日住、松井正純、小笠原日堂師ら檢舉。これは四年前、神道および軍部が、本尊の曼荼羅に、天照皇大神を題目の下におくことは不敬だと非難したのに始まり、軍當局は日蓮宗諸教團に、日蓮上人遺文の削除を指令、法華宗應せず。(一)日蓮聖人の遺文の不削除方針を堅持す。(二)新遺文集の出版に同意せず、と決議。問題は日蓮が天皇を「僅かの小島の主」とよび、崇峻天皇を「腹あしき王」と評した點(「本門法華宗」)。荻谷師は大審院まで抗争し續けた。(「教義綱要」)日蓮宗高佐貫長、増田宣輪師らを中心に「皇道佛教行道會」を結成、南無妙法蓮華經は神人の靈通する神祕の聲であり、これを言靈という、我々は天皇を御本尊とし、天皇に全身全靈を捧げるべきであり、「この根本信仰こそ眞の安心立命である」と説く。(6)「我國には眞に大所高所から國家のこと考える人なく、ありても力なく、致方なきことと存じます。どうも今の處、行く處まで到つて見なければ、分らぬという有様と存じます。」(西田幾輪木大)「聞く所によれば、例の養田一派の者共、大拙君

もねらい居る由、厄介な連中とおもいます。大拙君にも注意致し度存じ居ります。」(同、山本)「物言わぬ土人形のえがおこそ、世わたる道のしるべなるらめ。」(荷風)柴山全慶「十牛圖」(禪叢書)。

五月。内務省情報局指導、「官民一體」の「新聞連盟」結成。文部省、道府縣思想對策研究會擴充強化。「此頃政府はむやみに思想檢閲なるもの造り、此等の役人自分の仕事をするために、むやみに小さい事をほじくり出す弊あり。優秀なる日本思想の發達を妨げることをおもい、慨嘆の至りに堪えませぬ。」(西田幾多郎)共産黨轉向幹部田中清玄、龍澤寺山本玄峰老師に參ず。「築地邊の待合料理店は引つづき軍人のお客にて繁昌一方ならず、公然ウイスキーの如き輸入禁止品を使用し、或は賣買すると云。市中煙草小賣店の煙草、いよいよ不足となれり。刻煙草も早朝賣切になる由。但し軍部關係者また新橋の花柳界のみは、不自由知らずと云。」(日曆)

五月十五日、リップントロップ外相からオット駐日大使へ訓令、「日本のソ連沿海州奪取は、今が最好機なるも、決行は日本が成功確實との見通しを有する場合に限る。」總力戰研究所の東亞建設方略にいう「獨の戰況有利な時期をねらい、對ソ開戰をはのめかし、ソ連を壓迫しつつ獨ソ講和斡旋をはかる。」(6)

胡志明 Ho-Chimmin (一八九〇—) 中國廣西省柳州においてベトナム獨立同盟結成、蔣介石に捕われ柳州に監禁。

六月、獨ソ不可侵條約を破り、獨軍ソ連に侵入、獨ソ開戦。大本營南方施策要綱決定。陸軍徵用令決定。大日本興亞同盟結成(近衛文麿、林銑十郎、井田馨南、頭山滿、等)。大政翼賛會第一回中央協力會議。内閣に思想対策協議會設置。日本出版文化協會、出版用紙配給割當規定を實施。第一、回宗教報國大會。その基本方針「高度國防國家の建設、大東亞共榮圈の確立は、現下我民族に課せられたる輝しき世界的劃期的大使命であり…八紘一字の理想を具現する決定的な聖業である。…國家の凡ゆる物心を動員し、同一目的の無限大の總力を集注して、挺身これに當らねばならぬい…。」中國共產黨「反ファッショの國際統一戦線に關する決議」發表。オーエン・ラティモア、蔣介石の政治顧問となる。西谷啓治「世界觀と國家觀」(朝)。林房雄「勤王文學論序說」(朝)。中野重治「齋藤茂吉ノオト」。

七月、御前會議。實力による南方進出方策および關東軍特別演習(關特演)決定。後者は日ソ不可侵條約を無視して、對ソ攻撃を準備するもの、關東軍四〇萬を七〇餘萬に増強、戰時編成の十六個師團、二飛行集團をもつて、獨ソ戰が有利に展開する機會に、對ソ戰を強行する

態勢をとつた。南部インドシナ進駐。イギリス・蘭印など日本資産凍結、日英通商航海條約廢棄通告。朝鮮青年連合會、中國、朝鮮兩國人民による東北抗日連軍を組織、金日成(一九一—)その總司令、かれは「長白山の虎」として恐れられた。

文部省「臣民の道」發表。「世界史は滿州事變を以て新しき頁を書め始められた：世界永遠の平和を確保すべき新秩序の建設は、支那事變の處理を一階梯として達成せられる。従つて支那事變は、蔣介石政權の打倒を以つて終わるべきものではない…。皇運扶翼は、かかる非常の場合のみなことではない。平常心是道であり、我等の行住坐臥、一として國家に關係なきものはない…一椀の食、一着の衣と雖も、單なる自己のみものではなく、また遊ぶ閑、眠る間と雖も國を離れた私はなく…我等は私生活の間にも天皇に歸一し、國家に奉仕するの念を忘れてはならぬ。」

山邊習學「佛教の新體制」は、神道の國體方面は世界無比だが、國民鍊成の教化面が弱い、これを補うものは佛教であるとし、「佛教國有研究會」創設者中山理々氏が貴衆兩院議長に提出した、佛教の翼賛體制に關する請願の理由、「日本の佛教は、推古天皇の佛法興隆の詔勅以來、皇統御歴代の御崇信深厚に在しまし…日本佛教に

關する限り、教義も信條も、本尊も堂宇も境内地も、凡てこれ皇室と國民との一千三百年信仰積善の結晶：日本佛教は國體の精神的遺産にして、日本佛教の消長は、國體意識盛衰の尺度なり。」に同意し、また請願の要旨、

「一、政府は帝國領土内の佛敎寺院（以下日本佛敎寺院と稱す）住職をして、本堂に御歴代天皇の佛敎御垂示の詔勅を謹輯せしめ經典と共に日夕勤行の際之を拜讀せしむ。二、政府は日本佛敎寺院住職をして、寺院内に聖德太子を祀らしむ。三、政府は日本佛敎寺院住職をして修養、講學、祭式、布教及び檀家保護を命じ、その成績を檢し、優良なるものはこれを表彰し、不良なるものは之を宗派管長を通じて戒告す。四、政府は日本佛敎寺院を檀家統後保護委員、檀家思想保護委員、檀家司法保護委員に任命す」（傍點）（市川）に贊成し、日本佛敎が日本の國家性に關し國民に警告してきた功績をたたえ、國家信仰をもつて國教としようとする一部の行過ぎは誤りであるとし、聖德太子が國民精神教化の面を佛敎にゆだねられたように、また蓮如上人の「外には王法をもて表とし、内心には他力の信心を深くたくわえて、世間の仁義を本とすべし。」しかればわが往生の一段においては、内心に深く一念發起の信心を蓄えて、しかも他力御恩の稱名をたしなみ、その上になお王法を先とし、仁義を本とすべし。」

「王法は額にあてよ、佛敎は内心に深く蓄えよ、との仰せに候。」の趣旨にしたがつて、眞俗二諦、政教互顯の論理により、「内部國防としての佛敎」について力説し、「善説聽かざれば王師討伐す」（華嚴經）、「三界一切衆生を殺すとも、斯に因りて惡道に墮ちず」（般若理）の思想をひいて、大乘佛敎が正義の戰爭を支持することを強調。梅原眞隆「敬神と歸佛」は、新しく制定された眞宗本願寺派宗制が、「王法爲本ノ宗風ヲ顯揚ス」と明記したことを強調し、同宗制の「本派ノ宗風ノ要旨左ノ如シ。一、特ニ皇恩ノ辱キヲ感戴シ、皇謨翼贊ノ重任ヲ荷負シ、敬神崇祖、報本反始ノ誠意ヲ抽ツベキコト、二、深ク因果ノ理ヲ信ジ、現在ノ福利ヲ禁厭祈呪ノ方術ニ求ムベカラザルコト、三、常ニ報恩ノ念ヨリ職務ニ精勵シ、躬行實踐以テ國家社會ニ奉仕スベキコト。」を引き、神社を非宗教とすることによつて王法・佛法を二つながら全うしようとした明治の政策を支持し、葬式は宗教儀式であるとして、松永材（國學院大學）、下中彌三郎（東建連盟理事）らの、神式公葬論を反駁し、公葬問題に關する大日本佛敎會の次の聲明をのせている。「今や我國は超非常時局に直面臨し、一億一心の體制下に、各界擧つて至誠奉公に邁進しつつある秋、一部の無理解より、神佛關係において意外の相剋摩擦を惹起しつつあるやの感を呈するは、甚だ憂

慮すべき現象なり。特に近來戰死者の公葬に關し、これを神式に一定すべしとの意見擡頭せるため、地方によりては迷惑を感じおれるものある由なるが、この公葬問題は、國民大多數の信仰に關する重大問題なるを以て、慎重に考慮すべき必要ありと信じ、取敢えず本會の所信を披瀝して參考に資せんとす。∴條理かくのごとし。從つて吾等佛教徒は、斯る僻論に惑わされることなく、和衷協力御奉公に専念せざるべからず、これ實に惟神の大道を開顯し、大乘の風格を發揮する所以なり。」

山邊、中山、梅原の論理は、右翼排佛思想に對する佛敎の抵抗、いや佛敎の自己防衛としての自己喪失の論理的過程(とくに近世以降)の特色を、類型的に示すものである。このことは、右翼の誤解と非難に答えるために、新らしい論稿をかくことが、右翼へ接近する契機をもはらむにいたる、西田哲學の場合に似通つてゐる。

高見順「文學非力說」(新潮)は文學者における一種の抵抗。

八月。アメリカ對日全面禁輸。ルーズベルト・チャール會談、大西洋憲章(戰後の指)發表。學校報國團再編成を訓令。大政翼賛會ミソギ鍊成會に橫光利一ら参加。「禪の流行と共に、奇々怪々なもの多く、尊兄や大拙君に多く書いてもらいたいとおもいます。」(西田幾多郎)  
(久松あて)

「私の考はどうもライブニッツと最もよく相通ずると思ふ。矛盾的自己同一的一般者の論理、即ち場所的論理の立場から、本當に歴史的世界を包括した Mathesis Universalis ができそうだ。」(同 下村寅)拙著「大慧」(神叢書第 四)から、多少とも時勢に關連するものをひいてみよう。

「このように考えるならば、肚をつくるといい、肚がすわるといい、すべてこれ『造地獄の業』。よろずそらごとたわごとまことあることなし」といふべきであろう。政治は一切を手段化する。なかでも臨濟禪は、その活潑々地な機用のゆえに、武人政治家たちによつて、肚をつくる手段とみなされてきた。∴スピノーザの死をおそれぬ精神、親鸞の善もほしからず惡もおそれなしの確信、臨濟の隨處に主となるの態度、すべてこれ真正の見解(けんげ)の生むところ、決して肚や度胸の産物ではない。∴肚のない者は狐疑逡巡、優柔不斷にして、あたり實踐の好機を逸し、悔を千載に残すことはないか。然り、われわれはその事例を幾つも知つてゐる。しかし同時にわれわれは、肚を以て斷行したのために、不測の慘禍を招いた事例をも、尠からず見聞してゐる。そして兩者の統計的比較を知る由もない。ただ結果から眺めて、成功した果斷を「肚」といい、失敗した肚を「無謀」と呼び、同じく成功した逡巡を「慎重」といい、失敗した慎重を「優柔不

斷”と呼ぶまでのこと、あらかじめどの程度が成功的であるかを判定する規準は、それが具備する認識的的確性よりほかにない。このように、世間的事象の成否すら、知見の正否にかかつている。まして宗教的實踐の指標を“智慧”から“肚”に移すが如きは、悲しむべき逸脱である。「禪の他の一特質は、直觀主義である。このものの逸脱形態に、禪機ディレッタントイズムがある。：。そのような(直覺主義の)論理は、單に心境的な閉じた論理となり、社會的現實への通路を失う。大慧は往々“耳ヲ掩ウテ鈴ヲ盜ム”という語法を用いたが、この言葉はかような論理に向つても流用し得るであらう。行爲には無心に行い易いことと、無心に行い難いことがある。たとえば掠奪、虐待、殺生などは後の場合である。殺人狂にとつては、人間の生命は大根か人參の一種であるかもしれないが、その場合、大根や人參にされるものこそわざわざいである。“真人は過ても悔いず”と莊子は言つた。まさに般若の言葉である。しかし過つて悔いざることにおいて、狂人もまた同様である。(否、この場合には、過つという言葉すら適當でない。) … “聖靈によつて動かされる神の人々”にのみふさわしい、此の思いもよらぬ卓越を、イージーにおのが日常底の茶飯事と心得、“大用現前”の幻覺に遊ぶディレッタントはないである

うか。倫理學上、直覺主義の長所と不備とに關しては、既に定説があるが、この事情は、禪機ディレッタントイズムに對しても、有力な示唆となるであらう。大慧が“閃電火、擊石光の徒”を排した、一半の理由もここに存する。かれが大珠の言葉を引いて、“若し是れ見性の人ならば、是と道うも亦得たり、不是と道うも亦得たり。用に隨つて説いて、是非に滯らず”と言つたのは、専ら境涯上の消息についてであつて、客觀的世界の確實性、法則性に關してではない。内の世界の自由を、外の世界の必然と混同してはならぬ。ガリレオをして“だが動いている”と獨語させたものは何か。“火も亦涼し”は、まことに心境の透徹である。しかしこの拈提によつて、物を熱し物を焼く火の性質が變るのではない。… “この端的には、雪寶の謂ゆる一刀兩斷偏頗に任ずで、（前田利謙「宗場際りの裁斷以外には、何の顧慮もない」）”（教的人間）と言われる。けれども眼前の生活現實は、このような“端的”の連續ではない。私は今朝、本篇の脱稿に忙殺されながら、二人の知人から寄稿の依頼を受け、一人の知人から明後日の會合に出席の有無を問われている。數時間の後、私はこの三通の交渉に諾否の答を送るのであるが、その場合、私は現に入り込んでゐる生活連關のさまざまな視角からの分析、省察によつてその措置を決す



るのであつて、何の顧慮もなく、一刀兩斷的な端的の現前に俟つのではない。：農業勞務者は今日乃至今年の生活設計において、旅行者は目的地への到達に關して、主婦たちは三度の食事の調整に關して、どこにかような顧慮なき「端的」を見出すのか。のみならず、直覺は必ずしも天來の靈感といつた性質のものではなく、往々にして過去幾多の熟慮、省察、事上磨練の成果の、刹那的燃焼であり、このものですら完全に錯誤から脱却しているとは限らぬのである。このようにして、錯誤に對する反省吟味が要求せられ、實踐の客觀的妥當性把持のための、理論的な協力が要請せられる。「禪の第三の逸脫形態は前項とも關連するのであるが、風流ディレッタンティズムとも呼ばるべきものである：いたずらに風流の飄逸に馴れて、評價の規準を流動化し、改作の熱意を氣體化するならば、空華の萬行ついに痴呆的醜陋とえらぶところがない。いわゆるオポテュニズムと呼ばれるものも、またこの逸脫形態のひとつである。：自分の描いた聖者の裸像に、着物を書き添え、金箔を置くことを命ぜられた、ミケランジェロの不快は、必ずしもつねにかれのみに限られた無風流ではないのである。」

「八月十四日。人の噂に新橋の妓家にては、先頃より衣類家具を市外に持運ぶもの尠からざる由。新橋の妓は

軍人を第一のお客となすものなれば、其行動は輕視すべきにあらずと言ふものあり。此日夕刊新聞に、平沼氏遭難の記事あり。」(荷風)尾崎士郎「文學無力説」(都)、岩上順一「主體の喪失」(新)高村光太郎「智恵子抄」、三木清「人生論ノート」人間の幸福追求の意義強調、軍部ファシズムへの一抵抗。タゴール(一八六一—)死す。(日支事變以後日本に對し批判的となる。野口米次郎と論争)

九月。御前會議、帝國國策遂行要綱決定、事實上開戦時期決定。全海軍戰時編成。米穀國家管理實施要綱決定。大政翼贊會、東亞共榮圈文化工作方案決定。帝國石油設立。演奏家協會々員、音樂挺身隊結成(隊長山田耕作)。獨軍レングランド包圍開始。田邊元、「思想報國の道」(改)ロンドンにド・ゴール「自由フランス全國委員會」成立。

十月。近衛首相對米交渉に關し、東條陸相と意見を異にし、内閣總辭職。東條内閣成立。文相橋田邦彦、商工相岸信介。總力戰研究研究所設立。リヒアルト・ゾルゲ事件、尾崎秀實檢舉。獨軍オデッサ占領。フランス各地においてレジスタンス闘士ら大量處刑。「K君」(近衛)にはまた逢いませぬが、今度こそは行懸等に捉らわれず、大局を達觀して、身を投打つて決斷すべき時とおもいます。：誤れるものを誤とし、正しきものを正しとする、勇氣な

かるべからず。」(西田、<sup>あて</sup>)「『國家理由の問題』御一讀下さいましたか否や。いろいろ云う人もある様だが、觀念右傾の連中からつけ込まれる隙もなからうと思いが」(同、和辻<sup>あて</sup>)「これからの國家には、唯民族中心というだけではだめで、尙一步を出なければならぬと思うのです。」(同、木村<sup>あて</sup>)「『國家理由の問題』おすきの時御一讀下さい。自由主義とか個人主義とか云われる理由はなからうと思うが」(同、務<sup>あて</sup>)「倉田百三選集」いわく「營利というものが人間の心をスポイルし、婦人の戀愛と節操とをいびつにし、労働をやり甲斐のない金持への奉仕たらしめる所以を説き、子供の授乳と養育との出来ない資本主義の機構の不合理を絶叫して、一日も早く皇國の維新を成就しなければならぬ事を、全國民に訴えるのは、女性と母親との最高の愛國心の發露である(新日本の<sup>へ</sup>)」(日本主義は農本立國の國是を旨とする。如何なる<sup>むすめ</sup>言葉)「日本主義は農本立國の國是を旨とする。如何なる社會に於ても、原料を生産する農民が、之に加工する工業よりも、基本的でないいわれはない。かくの如き社會秩序は打倒しなければならぬ。」(日本青年の<sup>道</sup>)「日本主義の國民運動こそ、有史以來、世界で最も高貴な歴史的的精神乃ち皇道精神を準則として、國內を改革し、亞細亞を解放し。天下分け目の聖戰を闘わなければならない。」

(同、<sup>上</sup>)<sup>08</sup>  
曹洞宗、「曹洞宗報國會」結成、その三綱領、一、宗義ニ格遵シ、神訓ニ鑑ミ、國家報效ノ大義ヲ挺身實踐ス。二、信念ヲ確立シ、身心ヲ鍊成シ、以テ不測ノ事態ニ備フ。三、心的物的總力ヲ動員集中シ、以テ國家ノ要請ニ即應ス。」なお宗教團體法(昭一四)<sup>四</sup>にしたがい、曹洞宗教義を「本宗ノ開旨ハ。只管打坐シテ即心是佛ニ承當シ、興聖護國ノ大義ヲ宣揚シ、以テ實祚ノ無窮ヲ祝禱シ、聖化ノ太平ヲ祈念スルニアリ。」と決定。阪神商業、轉換期の商道に處する「肚」のある人物養成のため、毎日一時間全校生徒「肚」の鍛鍊として坐禪を行う。「眞宗の眞實宗教性と神道の國民道德性」によれば、最近神道内部に、紀平正美、植木直一郎、補永茂助氏らを中心に、神道國教化の動きがみられ、また神道を國教とし他の宗教を民教とする意見もみられるが、いずれも問題である。「日本精神文化に於て、國民道德理念として、嚴然たる存在意義を示している神道を、何故に今更種々の困難と危険とを冒して、宗教に改めなければならないのであろうか。：道德よりも宗教の方が優れた地位であるということとは出来ない。：神道は國民道德として、他の宗教に對して超越的な地位を保ち續けて來たのである。」佛教徒もキリスト教徒も、日本國民たる限り、皇國の理念に邁

進することは、極めて當然である。問題はこれを宗教だと規定することにある。神道のもつ宗教性は甚だ粗雑である。もしもこれを國敎とするならば、「國民の宗教生活のみならず、精神生活をも甚だしく低級化し、混亂せしむる危険がある。」「武力を持つて東亞の新秩序が成つた曉、文化的、精神的貧困を曝露し、共榮圈指導力を失うとすれば、盡忠報國の血を流した勇士に對し、何を以て答えんとするか。」神道の道徳性と眞宗の宗教性との矛盾的自己同一關係において、生きることが日本國民としての正しいあり方である。道徳は人間價值肯定の立場、宗教は否定の立場である。しかしこの否定は單なる否定ではない。宗教的にみて現實が不完全、反價値的であるということは、「だからこそ道徳、政治の必要が痛感される」といふ、政治的、道徳的努力の前提ですらある。「我等は斷じて眞宗信徒であるか、日本國民であるか、の分岐點に置かれてゐるのではない。…我等は眞宗信徒たる前に日本國民である。日本國民たるに反して、眞宗信徒として護るべき、何等の領域を持つてゐる理ではない。日本國民であることによつて、より眞實なる日本國民たるべく、眞宗信徒たらんとするものである。…宗教は宗教として國民道徳と本質的には自己同一の關係にある。手ぎわよくまとめられてゐるこの著作は、しか

しながら問題の核心にはふれていない。「眞宗信徒である前に日本國民である。」という場合、その「前」というのは、國籍の上でということなのか。何か價値上の優先をふくむのか。宗教的否定は、却つて道徳的努力の前提でもあるという場合、その道徳的努力は國體明徴の論理の上でのそれであるのか、「より眞實なる日本人」というのも、その線上での事柄であるのか、明らかでない。宗教には宗教道徳があるはず。神道をもつてこれに代えるというのは、論理の飛躍・放棄であろう。

福場保洲「白隠」(禪叢書)第五。高見順「再び文學非力説について」(新潮)田邊元「國家の道義性」(中央公論)。

十一月。御前會議、開戦時期決定。眞珠灣奇襲部隊エトロフ島發航。國土防衛總司令部設置。國民勤勞報國協力令公布。大學・専門學校修業年限を六カ月短縮。尾崎秀實の獄中書簡(「愛情はふる星」のこごとく)所收)始まる。尾崎、禪に親しむ。「佛敎人生論」によれば「佛法の中に於いて情を生ずれば世法であり、世法の中に於いて情を生ぜざれば佛法である。情とは私心である。私心を去れば世法がそのまま佛法となる。現下の非常時局に際し、私心を去つて誠心誠意國家に御奉公する、それが臣道の實踐であり、佛道の修行である。一塵をあぐれば大地收まり、一花開けば世界起る。一は即ち一切であり、一切は即ち一であ

る。この法界緣起の理は、そのまま大政翼賛、職域奉公の新體制理念と共通する。(頁1)「皇道は至道…至道は無難である…只だ揀擇を嫌う。あれやこれやと、自分勝手の理窟をこねていては、皇道の實踐はむずかしい…議論は無用…勇往邁進あるのみ(頁4)。「佛道を習うは自己を習うなり。自己を習うは自己を忘るるなり。…大東亞共榮圈確立ということが、日本にとつての即今目前の大道である以上、この大道を體解し實踐することが、眞理に歸一する所以であり、隨處に主となる所以である。隨處に主となれば立處皆眞理ならざるはない。(10・11) (引用文カッコ内の數字は)「大政翼賛は…個が即全であり全が即個である、という佛教の緣起觀と一致し、一即一切、一切即一の華嚴の學說とも一致する」(21)。

「國體と佛教」によれば、昨年末から本年にかけて、日米開戦の覺悟をかためたが、昨今では別の不安が現れた、それは平和攻勢の心配である。「平和攻勢といいますが、それは、アメリカに巢をくつて居りますユダヤ人が、ドイツから驅逐されフランスから逃げ…是等のユダヤ人が一體になりました…至急にルーズベルト、チャーチル等を使ひまして…必ず彼等は第一に日本に向つて平和攻勢を向ける…第二には文化攪亂でありまして…個人自由思想の主張、或はクリスト教の宣傳…次には經濟攪亂であ

りまして…デモクラシーや共產主義と相並びまして、ストライキ、組合運動…貧富階級鬭争…是は國體に反する事であり…此の戦術が最近猶太人の計畫しつつある所、此の猶太人を中心として襲い來る所の平和攻勢を如何にして撃退すべきか」(頁8)このジューの撃滅の先頭に立つのがヒトラーである。ヒトラーのドイツはたのもしいが、日本は非常に覺束ない(同)。「平和が最も恐ろしい、激戦尙可なり、持久戦最も望ましい」(13)「天皇が中心におなり遊ばして、滅私奉公の大道となり…この大事なものを、はつきりと認めなければ、如何に法華經を講じ、久遠壽命を説いても、又如何に淨土の無量壽經を説いても、それは經文の請賣りであります」(39)「自分が大御稜威に従つて行く、それが本當に彌陀を信ずるといふ事、それが大日に歸一するといふ事、それが本當の色心一如の姿である」(94)

「信仰は個人の自由だなんと云う事は、全く耶蘇教にかぶれたもので、西洋の低い思想を眞似する者である」(115)國民に戦争の實態を知らせてはならない。「昔は女房、子供でも欺して知らせんようにした。知らなかつたら時局の重大性を背負えないという考え方は、到底擧國一致は出来ません。…日本には大いなる詔があります…其の理由、其の方向は知らず分らないでも、之につい

て行く事が出来る」「佛教というのは、天皇の絶対性と本尊の絶対性とは、一如一體であるというのが、本當の性質であります。」(186)「舊幕時代に於ける佛教、各宗寺院は：枕經とか、或は棚經とか、精靈祭とか様々の名に依つて、其の檀家がそれぞれの今日の信仰状態、或は生涯の信仰状態を調査する警察権能を持つて居つたのであります。」(205)「新體制が整いまする時、佛教がそれに深入りをする事が出来なくなつたならば、それは佛教全體の教化力を失います。」(211)

十二月、午前六時臨時ニュース、「大本營發表、帝國陸海軍は、今八日未明、西太平洋において、米英軍と戦闘状態に入れり。」釋尊成道會に學生と共に隨喜、楞嚴行道中にサイレンの吹鳴をきく。臨時ニュース、眞珠灣攻撃戰果發表。マレー沖海戰。香港、ゲアム、ウェーク島占領。マレー半島、フィリピン上陸。佛教界、釋尊成道會に戰爭に突入したことを喜び、米英降伏は涅槃會の日であろう、などと豫言した。日獨伊戰爭共同遂行協定調印。獨伊對米宣戰。國民徵用令強化。言論集會結社等臨時取締令、戰時犯罪取締令、農業生産統制令、物資統制令公布。開戰の翌日情報局は出版社に「世論指導方針」を指示、その具體的指導方針にいう。「一、わが國にとつて戰況が好轉することはもちろん、戰略的にも、わが

國は絶対優位にあることを鼓吹すること。二、國力なからんずくわが經濟力に對する國民の自信を強めるよう立論すること。三、敵國の政治的經濟的ならびに軍事的弱點の暴露に努め。四、ことに國民の中に英米に對する敵愾心を執拗に植えつけること。」。全國各地の街頭、電車、店内にかかげられたポスター「屠れ米英我等の敵だ。進め一億火の玉だ。」文學者愛國大會。

日本陸軍、その六〇%を共產軍遊撃區の掃討に投入、降伏した國民黨軍の九〇%がこれに協力。日本山妙法寺僧ら日本軍と協力、ビルマ、セイロン、インド方面に活躍。妙心寺派僧後藤亮一らのビルマ協會活動に入る。松岡外相、獨伊訪問、途上スターリンと會見。日本共產黨「太平洋反日統一戰線」の結成を指示。保田與重郎「近代の終焉」。同「文化維新」にいう、「文學の道とは、神の教えとすることである。畏きことを申すようだが、軍人ニ賜リタル勅語」は、我國軍人の精神を無朽に教えられたものである。これは戰陣訓が近代科學戰に對する心得を説いているところと異なるのである。つまり勅諭は、神の教えであり、戰陣訓は人の教えである。我國の文學は、古典にも神詠に始つたとある如く、神のおしえを文學のみちとしたのである。」

文部省教學局編「國民道德大意」(西晉)はいう、「人

間の人間たるは、民たるにある。」人類に通ずる一般道徳は存在せず、あるものは國民道徳のみ。我國は西歐と異り、「社會を以てせずして家族を以て國家の原型とし、同等を以てせずして、尊卑を以て人生を制し、利の分配を以てせずして、生命の本末を以て、人情を満足せしめようとする。生命の本末とは、君は臣の本、臣は君の末：一君萬民：國土民族の地縁血縁のつながれる大親である神と、その神の分枝葉茂れる、國土民族の大宗と仰がれる皇と、一體連綿であつて、現の皇を神さながらに仰ぐ所に、餘所の人君には仰がれぬ威徳を感ずるのが、大御陵威を仰ぐことである：これを我が國民道徳の極致とする。」

河合榮治郎、有罪判決。戸板潤、第一審判決十年、直ちに控訴。河上肇、十二年ぶりに京都に歸り、居を上京區聖護院中町に定む。大阪府刑事課、青少年の不良化防止のため、近畿の青少年をミソギと坐禪により鍊成すること決定。日本基督教團「本部通牒」にいう「祈禱のあるところ必ず勝利あり。この際キリスト者は、祖國のため結束して祈禱につとむべし。」北條時宗廟のある鎌倉圓覺寺棲梧實嶽師、成道會當日開祖佛光國師語録に次の一句をそえて東條首相に贈る。「昔時北條。今日東條。報國一喝。元無二條。」「宗教報國」(教)はいう「正法を護

持し、正法國家を建設する爲には、戦いは避くべからざるものとするのであります。今次支那事變に際しまして、一部宗教家の中に、殊に英國のカンタベリー僧正の如き口吻を洩しているようであります。これは謬れるも甚しい、と申さねばなりません。：皇軍出動の目的は、：排日、抗日、毎日をつづけて、我が權益をふみにじり、かつ自國民に對しても、搾取してあくなき軍閥をようちようし、ソビエト・ロシアのさし出す赤き魔手を拒否せしめ、以て眞に支那四億の民をして、平和の生を享けしめ、延いて東亞共榮圈の樹立と、東亞永遠の平和を確保せんが爲めに外ならぬ：まことに正々堂々、一殺多生の大乗精神を、如實に發揚せるものであり、かの一部の平和論者の如きは、全くかかる聖なる戦の立場を理解せぬ暴論であり：利己主義に基く中途半端の平和論が、いかに大局を誤るか：折伏門の教旨を徹底して領解すべきは、寧ろ銃後の婦人にあると言つても過言ではなからうと存じます。」この年から明年冬にかけ、ドイツに反ナチ秘密組織各地に成立。プロテスタント神學者デイトリヒ・ボンヘッファーがさきにラインホルド・ニーバーに於てた手紙「ドイツのキリスト者はキリスト教文明の存續のために自國の敗北を望むか、自國の勝利を望む結果われわれの文明を破壊するか、というおそるべき二者擇

「に直面するでしよう。」

E. Snow, The Battle for China. J. Nehru, The Unity of India. A. Alain, Elements de philosophie. A. Maurois, Tragedy in France, 1940. 邦譯「フランス敗れたり」(1941)

R. Niebuhr, The Nature & Destiny of Man. E. Fromm, Escape from Freedom.

文部省「大東亜新秩序建設の意義」。蠟山政道「東亜の世界、新秩序への論議」。大熊信行「國家科學への道」。佐藤通次「皇道哲學」。四王天中將「ユダヤ思想及運動」。荻田胸喜「學術維新」。清水幾太郎「社會的人間論」。三木清編「現代哲學辭典」。西谷啓治「世界觀と國家觀」。福島政雄「孝道の自覺と佛敎」。北村定吉「五山文學史稿」。玉井是清「支那社會經濟史研究」。講座「禪」(雄山閣) 禪叢書(弘文堂)

一九四二(一七)。一月。一月八日第一回大詔奉戴日。日獨伊新軍事協定調印。マニラ占領。ビルマ侵入。翼賛壯年團結成。評論家愛國大會。衣料切符制。三木清、陸軍報道班員に徵用マニラに從軍。小説家茅盾(一八九六一)香港脱出。北海道函館の聖公會系、日本基督教團教會牧師小山宗祐氏、未決監房で自決。米田豐氏(六月逮捕、東京聖書學)は、こうのべている。「筆者も昭和三年頃、神社参拜を拒否したために、在學中の中學校から退學を要求された一人である…が、直接官憲の彈壓とはいえない。

…小山氏は隣組が輪番制で毎朝参拜に行く護國神社参拜を拒否したというので、訴えられ、憲兵隊と警察署の調べるところとなり…然し公判による判決が下る前に、彼は監房で自決…自決でなく、絞殺されたのではないかと疑う者もあつたが、當局の發表によると自決であつた。」日本基督教團の、大詔奉戴日についての通達にいう「禮拜より切り離して行なうのではなく、禮拜の一部として守り、禮拜が同時に必勝祈願であり、必勝の信念の昂揚であるよう導かれた云々」。「中央公論」座談會「世界的立場と日本」、参加者、高坂正顯、西谷啓治、鈴木成高、高山岩男(昭一八・三發行の單行本は次の座談會を含む。三、總力戰の哲學。)これは當時の知識層を戦争協力に結集するための、理念的基礎を提供するものとして重要であり、戦後、これに關する多くの評論がある。「…軍人執政の世となりてより、ミソギと稱すること俄にはやり出せしなり。寒中の水浴もし精神修養に效果ありとせば、夏日暖爐を擁して、熱湯を飲むも亦然るべし…近年紳士學生等のミソギ、女事務員の参禪の如き、皆阿世の行爲にして、具眼者の潔となさざる所なるべし。」(荷風)「三圓」。俸給割合奈不<sub>レ</sub>上。細君捻<sub>レ</sub>首月末邊。」

「禪戒本義を語る」はいう、「法華經の『三界は皆是

れ我が有なり、其中の衆生は皆是れ吾が子なり。”ここから出發すれば、一切のものは、敵も味方も吾が子、上官も我が有、部下も我が有、日本も我が有、世界も我が有の中で、秩序を亂すものを征伐するのが、即ち正義の戦さである。ここに殺しても、殺さんでも、不殺生。この不殺生戒は劍を揮う。この不殺生戒は爆彈を投げる。だからこの不殺生戒というものを參究しなければならん。この不殺生戒と云うものを翻譯して、達磨はこれを自性靈妙と云つた。<sup>(4)</sup> 齋藤茂吉「開戦」高村光太郎「彼等を撃つ」文化人宣言「戦いの意志」<sup>(文)</sup>。

二月。翼賛政治體制協議會發足。大東亞建設審議會設置。愛國・國防・連合三婦人團體解散、大日本婦人會創立。日本少國民文化協會結成。「新聞連盟」解散、日本新聞會設立、日本新聞記者規程制定、記者の根本資格として「國體ニ關スル觀念ヲ明確ニシ、記者ノ國家的使命ヲ明確ニ把握シ、カツ常ニ品位ヲ保持シ、公正廉直ノ者タルコト」を要求、記者、従業員にミソギを行わせた。戦時刑事特別法公布。思想國防協會主催、思想國防講演會。シンガポール占領、「昭南」と改稱<sup>(まもなく天照大神社「建設券」)</sup>、陸軍報道部長「大東亞戰大局は既に決した」と發表。情報局編「週報」に「思想戰讀本」連載。毛澤東「黨八股」に反對、「三風整頓」運動始まる。<sup>(5)</sup>

「大詔奉戴」<sup>(福山界珠)</sup> はいう「日々是れ大詔奉戴日、時々是れ大詔奉戴日、刻々是れ大詔奉戴日で少しも油斷があつてはなりません。：毎朝、佛壇神棚にお詣りをしたならば、直ぐ宣戰の大詔を奉讀して、大御心に副い奉ることを覺悟すると同時に、この常濟大師の御示しを奉じて、人々は是れ道器なり、日々是れ好日なり」と讀むことを忘れぬようにして貰いたい。<sup>(6)</sup> 拙著「禪の基本的性格、時局に關する言葉なし。寺岡峰夫「ヒュマニズム追放」<sup>(思)</sup> 長興善郎ら「大東亞建設と日本文化建設」<sup>(新)</sup>。

三月。ビルマ、ラングーン占領、ジャワ、パタビア占領、ニューギニアに上陸。マッカーサー、西南太平洋連合同司令官に任命。翼賛紙芝居研究會結成。河合榮治郎「學生と哲學」と三木清「現代哲學辭典」に情報局絶版勸告。「大東亞戰爭と禪」はいう、「十二月八日の釋尊成道の日に、布哇の大勝があつたので、次の新嘉坡の陥落が、或は釋尊涅槃會の二月十五日ではなからうか、と何となくボンヤリとそう思えた；果してそれが實現した。：只だ此の様に月日が合つたというだけの點からも、大東亞戰爭と禪との關係があると云い得る；大東亞戰爭を完全に勝ち抜くためには、どうしても此の禪を活用せねばならない；『戰』と『禪』とに共通するは、『單』である。單はヒトツ、ヒトリ、ヒトエ、ヒトエニと訓むが、



何れにしても二つないことである。ヒトリでも一枚でもよい、誰も何時も一枚であり、獨りであつて、二人も二枚もない：眞の一億一心である。此の一億一心に歸つて、因果必然を善用する禪こそ、大東亞戰必勝の法である。世に禪書を読み、禪書を講ずるが、更に實參實究したこともなく、又それを嫌う人が随分ある、然し此の實參實究こそ公案三昧である。之を嫌うは私案である。現成公案の爲に私案の夢を打破すべきである。米英は私案の徒であるが、天地はこれ公案三昧である。米英は日本の實力を過小評價して無視し、反つて自國の武力を過大評價し、米英が必ず勝つてると見たことは、全く私案である。私案は事實無根である。私案は事實によつて公然と否定される。然し此の公案自身は、必ず事實となつて現成する：元來天地に只だ一つの大公案がある。：即ちそれは因果必然の法である。：日本こそ過去三千年の古より、今日に必勝すべき戒を護持して來たが故に、今日の勝利を得て居る：之が公案であつて、必ず實現成就する。又必敗戒を守つた米英が、必敗するに至つたことが、公案現成である。然るに、必勝戒を守つた日本が敗けると見たり、必敗戒を守つた米英が勝つと誤解することが、即ち私案であり、迷妄である。：然るに今日の我等の禪の多くは、机上の空論禪ではなからうか。即今の主人公が

雲がくれして、奴が主人公面してはいなからうか。此の様な机上禪では、大東亞戰爭に利用どころか反つて足手まといではないか。」「一眞實の世界」送り來る。多謝多謝。人生いつまで辛抱すべきかの言、眞に然り。こゝろ世界中の人狂うては、遂にいかがるのか。一人達識の人なきか。遂にノアの洪水來らん。」(西田あて)「三月十九日。晴。上野東照宮五重の塔のほとりの休茶屋にては、毎年花見の時節には、茶汲の女に赤禪、赤前垂をしめさせ居たりしが、この程警察署にて、赤いものは目に立つ故、綠色または桃色位にすべし、と命ぜし處、茶屋のかみさん承知せず、赤いもの御禁止はいかなる譯にや。日の丸の旗も赤いではありませぬか。赤前垂はお花見時分にはふさわしきもの。もしそれがいけないと云うことなら、お上の御威光で、春も來ず花も咲かないようにして下さい、としやべり立てられ、巡查も閉口して、遂に例年通り赤前垂許可になりしと云。」(荷風齋藤响「教育刷新の根本義」(文藝春秋)。

四月。「本邦開闢以來」(鳩山)の翼贊選舉施行。反ユダヤ運動の四王天中將最高位當選。佛教界にこの運動の支持者多し。當時、尾崎行雄、犬養毅「ユダヤ人の手先」とよばれ、民主的平和論者はユダヤ人の陰謀におどる者とされていた。興亞宗教同盟創立。朝鮮に徴兵制施行。

米機東京を初空襲。名古屋、神戸に來襲。尾崎行雄不敬罪で起訴さる。高村光太郎「大いなる日に」(中公)。西谷「新しき人間形成」(造)。中央公論座談會「東亞共榮圏の倫理性と歴史性」。中共幹部必讀文獻委員會「思想讀本」刊行。

五月。翼賛政治會發足。大東亞建設審議會第三回總會において、政府大東亞建設に關する文教政策決定。日本文學報國會結成(會長徳富蘇峯)。「本會は全日本文學者の總力を結集して、皇國の傳統と理想とを顯現する日本文學を確立し、皇道文化の宣揚に翼賛するを以て目的とす。」建國會、大日本生産黨、國粹大衆黨、東方會、解散、それぞれ思想團體に再編。ゾルゲ事件發表。津田左右吉公判。毛澤東、延安文藝座談會において「現段階における中國文藝の方向」講話。在米プロテスタント神學者パウル・テイリヒ、今次戦争の意義について説く。「白薔薇通信」のハンス・シヨル、反戦運動開始。與謝野晶子歿。

六月。大政翼賛會全面改組。中央教化團體連合會による大東亞戦争完遂教化振興全國協議會。日本文學報國會發會式。アツツ島占領。ミッドウェイ海戦、空母四撃沈さる。大本營發表「今次の一戦に於て、米航空母艦勢力を殆んど零ならしめ、太平洋制覇權の歸趨全く決した。」

これ以後、大本營發表出鱈目となる。「機密戦争日誌」

(陸軍) はいう「六月九日。一、ミッドウェイ海戦は帝國海軍の敗勢を以て終了せるが如く、帝國のミッドウェイ攻略の作戦目的は終に頓挫す。六月十日。一、ミッドウェイ海戦、アリューシャン作戦の戦果に對し、大本營發表す。海軍苦しい發表。同情を表す。遂にミッドウェイ作戦の作戦目的達成せず。六月十一日。一、ミッドウェイ、アリューシャン作戦の戦果に關し、新聞一齊に之を飾る。赫々たる戦果に、國民は歡喜す。何ぞ知らん、F作戦は數カ月遅延し、戦争指導は茲に難關に逢着す。」小林秀雄「無常という事」(文學界)

京都東福寺、梵鐘、佛具等、塔中約二十五カ寺から供出(補註)。神學者ボンヘッフアー反ナチ抵抗組織に参加、ヒットラー暗殺を肯定するに至る。

曹洞宗報國會、大本山總持寺と宗務院を會場として戦時下皇民鍊成指導班員養成所を開く。キリスト教ホーリネス系教會の幹部、淀橋教會・小原十三司、神田教會・車田秋次、聖書學校長・米田豊ら三氏を始め牧師百餘名を檢査投獄、取調べ慘虐、絶命者六。「警察、巢鴨拘留所などを轉々とさせられて一年餘り、十八年八月二十一日、編笠をかぶり、護送されながら、日比谷の豫審裁判所へ向つた。：幹部は七年から六年の實刑であり、その他は

それぞれ六年以下の實刑が當然と求刑：上告を取りさげよ、さらば特赦によつて許すとの内示：私達は無罪を主張しているのであつて、「罪を犯したが許しを」と乞うているのでないから、これには應じなかつた。：訪問、獻金、集會の一切を許さないと厳命は、牧師より教會を奪うことであつた。(米田豊氏手記「キリ」)「昭和三年の共產黨の三・一五事件後、治安維持法の改正により、特高警察網は全國に確立された。この治安維持法が基督教會に適用されるとは、クリスチャンの殆どが豫期しなかつたことである。治安維持法の第七條、治安警察法第八條及び宗教團體法第十六條等が、檢舉とその後の裁判の法律的基礎となつたといわれる。：私の家では、私は辭職し、父は警視廳より拘留所に移されており、妹は胸を患つた病後の身である上に、母は十年間の中風で身動きが出来ずに病床に臥せつたきり、しかも物もいえないという状態であつた。私の働き場所はなかなか見付からず、一時は一枚一厘の工賃の袋貼りさえした。(勇)」

「天龍寺で牧師が坐禪：京都における全キリスト教各派の牧師達三十六名が日本基督教建設の心構えと、その參考にするという立場から、嵯峨の天龍寺を訪い：参加した人達の感想を総合すると、一禪宗の高僧達が、行住坐臥に禪を生活した態度は、我々キリスト教徒としても、

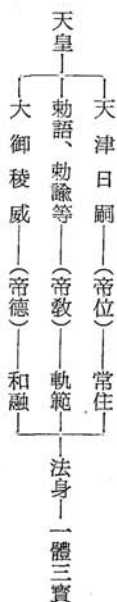
福音をもつと生活化すべきことを教えられる。：日本の風景の中に溶け込んだ寺院の美は、張りぼての教會建築などとは、比較にならぬ。苔むす庭、あの苔が語る聲をもつまでに、我々の教會も地に着かねばならぬ。」「石上で女生徒の坐禪、神戸六甲高女では、今春四月開校以來、永田校長、教職員、生徒一丸となり、日光の直射する石上に端坐、島田講師、高見理事指導の下に、樹下石上の本格的坐禪を行い、苦行を通じて心身を鍛え、大いに成績をあげている。」

「思想」特輯「大東亞戦争」、内容、高坂正顯・大東亞戰と世界觀、飯倉龜太郎・國家と戦争、平野義太郎・諸民族統治・指導の原理、班目文雄・大東亞の國境理論、岩村忍・亞歐大陸諸民族活動の方向についての史的考察、江澤讓爾・生活空間と國防空間、大熊信行・われわれの問題。「どうしたならば、日本の現實が、この一個の日本人に呑みこめるようになるのであろうか？：山の岩間にでもすわつて、谷水の響を聴き、白雲の去來する姿をながめながら、考えなければならぬかぎりのことを考え盡くし、もう一つ別な自分というものに還れるまで、そこを動かないと決心するか、裸になつて瀧にでも打たれてみるか一言葉としていえば、宗教的な發心の直前の事に似たものを語るようだけれども、自分ではそうでない。

このままでは自分が自分に成りきつたとはいえず：日本の歴史と自分の全存在とのあいだに、すきまのない状態が来たとおもえない。自分というものが嘘のようにおもえてならない。」(大熊信行、同氏は戦後誠實な自己檢討の勞作「國家惡」を公刊された。)

「恩一元論」はいう、ここに佛教を「皇道佛教」とよんで「日本佛教」とよばないのは、それが日本に行われている佛教というのでなく、歴代天皇の御庇護の下に、榮えることができ、ひたすら惟神の大道による天皇中心の、皇運を扶翼し奉るための佛教だからである。印度人は自己の解脱のために「無我」を觀するが、日本人は一死報國のために無我を觀する。佛教は「直枉の宗教」である。三寶に歸して枉れるを直す(憲法十七條第二條)宗教であり、枉れるとは、皇國の臣道の實踐から逸脱することである。皇道佛教の原理は、「大乘本生心地觀經報恩品」にもとづく、「恩一元」の緣起である。「我國にありては、皇國體はもとより趣異にしているから、恩についても絶對的の意義を見出し、われら臣民は華國久遠の源初より、絶對的に神恩を蒙つて居り、廣大無邊の君恩をいだいで居ると信知している。：教育勅語の『我カ皇祖皇宗ヲ肇ムルコト宏遠ニ、徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ。』ここに恩一元緣起の根據あり：」四十華嚴經の「我が國の大王は種族尊勝なり、嫡嗣承襲して歷代相傳せり。」佛本行

集經の「彼の家の種姓は眞正無雜なり、乃至、彼の家の體胤は嫡々相承して斷絶あることなし」はまさしく萬世一系の日本天皇において完全に具現されたのである。もし佛陀が日本國に來生せられるならば、必定まず天皇絶對をお説きになり、以て國體を明徴したまうことはいうまでもない。」聖德太子「勝鬘經義疏」の一體三寶を、現代の視點から略示すれば次の通りである。



なお「言論昭和史」(三)に次の記事がみられる。「ところが六月號でまた京大教授高坂正顯の『思想戰の形而上學的根據』が掲載されたことに對して『中央公論』の編集態度は反省の色なしとして、更に強硬な態度で臨んできた。というのは京都學派については、：『世界史的立場と日本』以來、陸軍報道部で批判されていたもので、國史をはなれた西歐流の考え方で太平洋戰爭の解釋にあつては、というのが、排撃の理由であつた。」

七月。細川嘉六「世界史の動向と日本」(延安において金科奉(一八八九)の朝鮮青年連合會、朝鮮獨立同盟に改組、抗日義勇軍結成、五大部門二十五項目の、反

日闘争及び民主共和國建設のための具體的な綱領を掲げた。<sup>(30)</sup>「生活禪談」は云う、「隨順ということは、物に隨うことである。なんと云うことはない、隨順するのである。昨日は昨日の仕方がある。今日は今日の生活がある。：今は今、去年は去年、一昨年は一昨年、それが隨順である。つまり大自然に少しも逆らわない。雨の降る時は降る、辛い時は辛い；戦はなんで戦をして居るか。デモクラシーと日本精神との戦であることは、申す迄もない。そうして日本が勝つたということは、慧日破諸闇、智慧の日が諸の闇を破る：」

「日本基督教の問題とその理解」(桑田<sup>(31)</sup>秀延)は、こんにち基督教が直面している問題は、時局的というよりも一層根本的な眞理問題であり、「基督教も歴史のなかに活きている現實的な宗教であつてみれば、抽象的にでなく、寧ろ具體的に現實的に理解してゆかねばならない；イエスの宣教の具體的な場合がイスラエルであり(マタイ傳<sup>(32)</sup>一五・二四)異邦人の使徒として選ばれたパウロが、如何なる熱情を自らの同胞に對していただいていたか(三、一〇・一一)；現實の場をもたないような、信仰生活や宣教は、現實的にはあり得ない；」として、基督教神學の再檢討と再建設の必要を説き、問題の焦點は、「我々が眞に皇國民とし

て生きることと、基督者として眞實に信仰に生きることが、一本になることである」として、苦しい思索をつづけている。<sup>(33)</sup>

「正法の開顯」<sup>(34)</sup>によれば、百濟の聖明王が欽明天皇に奉つた上奏文は、佛法は印度に起つたが、縁づく先は日本という意味をのべている(19頁)。(市川註。上奏文にこの)この戦争は、世界平和の確立という誓願に立つ「聖戰」である(20)。佛典は、仁王と佛法との不離の關係を説くが、「佛法は民主主義の國にも行われる」とは、決して説いていない。「王難」という言葉があるが、これは「覇者の政治であり、或は民主主義的なもの」である(21)。「十七條すべてが惟神の道」であり「十七條の憲法が、或る意味においては、日本の佛道である」(31)ここに「神道の一部として佛法を崇めてゆく道」が成りたつ。これを「神道・佛智・和國を成ず。」と要約することができる(31)。「和」とは、みんなが仲よくすることではない。二人なれば二人力、五人なれば五人力ということではない。あの男が一人いなかつたら、能率が上るという場合には、その一人を減ずることによつて、能率が上る、「五から一を引くと八人力、ということになるかもしれない」(36)それが「和」である。「和」にはこのような「強味」が

なければならぬ。「和」は上下の秩序の原理であり、これに根據を與えるものは、佛法である。この原理による「嚴正差別の國」こそ、日本に外ならない(48)。陛下と國民とは、祖先を辿つてゆくと同一になる、というのは畏れ多いことで、陛下の御祖先と臣民の祖先とは、同じ神とよばれているが、實は別なものだという説があるがこれが正しい。「義は君臣、情は父子」というても、義が根本である(131—138)。

事實の上からみると、日本は神々に生んで貰つた國、神々の御育てによつて出來た國である。神なければ日本の國民なく、神なければ日本の國土もない。この事實全體が佛教の智慧から領會せられるのであり、われわれは「萬邦無比のこの國に生れさせて頂いたのである」(79)。「この國はどこまでも陛下の國である。天皇ましますまじくば、我々の存在すらない」(82)。「佛法は別に要らない……肇國の精神のうえにあらゆるものを具えている……皇國の道というものが、即ち我々の遵守すべきものである。佛の教というものは、その縁になるものである」(85)神の定め給うたものが國民道德、これを示すものが歴代の詔勅であり(87)「篤敬三寶」は、これを實踐するための手段・方法である。しかもこの國民道德が同時に超國家的・世界的であることが、「コレヲ中外ニ施シテ悖ラ

ズ」の詔によつて示され、萬國の萬民がしたがうべき道であることが明らかにされている(91)。これを體して枉れるを直してゆくのが、直枉の佛教である(100)國體、即宗教であり。「佛教に關する限り、宗教という名前は、國體の方へ差上げてよい」(104)。國體を仰信して、「安心をして戦い、安心をして働らき、安心をしてまつりごとを執り、安心をして教壇に立つ」、これが眞宗教徒としての獲得、「法が身につく」ことである(179)。(傍點) 市川

拙論「清貧について」は、柳田謙十郎著「道德的精神」の終章「無所有」の倫理を紹介・批評したもの。「卷首からこの章に至るまでの構想と省察とは、……在來の官學的倫理の枯渴索漠に代えるに、潑刺たる生命の血肉を以てし……倫理を眞に深く且つ遅ましい根據に礎定されたことは、畏敬すべき業績といわねばならぬ……しかし私見をさしはさむことを許されるならば、(1)出世間的な厳しさと世間的な甘さとが……混在もしくは媒介されている……われわれは教授の最近の論稿「世界宗教と國民宗教」における安易な論理を、本書の「絶望」の章に示されている厳しき心理に照し合せるとき、その間の深淵に當惑せざるを得ない……今日わが國の歴史哲學者たちは、歴史の底にひとつの「無」を見るのであるが、このような「無」

はなお流轉的な陰影を脱していない(市川註。京都學派の歴史哲學を意識して)；教授が動物と人間との相違を精神に於て見、精神とは、その中に自己を否定する他者を含みながら、これを絶対否定的に肯定する、自覺的創造の原理である”といひ、單なる自然の世界と歴史の世界との區別を、**“絶対矛盾”**の有無に置かれるのも、あの安易な不透明に基づくのではないか。

(四)教授は、所有の原始的形態として身體の所有をあげ、**“眞の自己は身體を道具として有つ所に成立する”**といわれる。しかし眞の自己の働らくところは、身心一體の活動であつて、我と身體との間に、使用者と道具との關係乃至關係は存在しない；我と身體とを所有關係において見ることは、眞に具體的な見方ではなく、これを所有の原始的形態と見ることも、如何かと思われる；い文化が物質的制約を離れてはありないうこと、客體的な物が與えられない所に、制作的現實はないといふこと；しかしそのことと、我が物を所有するといふこととは、別の事柄である。物は文化創造の不可欠の基礎であるがこれを所有することは、更に複雑な社會的段階の事柄である；人間の生活がある所、そこに必然的に物の所有があるべきであり、物の所有のない所に、人間の生活はあり得ない”といふのは、嚴密を缺いてはいまいか。(四)

物の使用と占有と所有とは、區別して考えなくてはならぬ。所有は單なる本能の現われではなく、使用、占有の段階を経て、經驗的・推論的に、或はむしろ法律的に形成された生活形態である。所有については、私有慾の排他性としての心理的乃至倫理的に分析・批判せられる部面と、律法的乃至社會史的に考察せられる部面とを、區別しかつ綜合すべきであり、さらに私有と公有との重要な區別が閑却されてはならず、公有については、管理の倫理の重大性が指摘されねばならぬ；問題は、何を、どの程度に、如何なる態度、乃至組織力を以て、所有もしくは管理、保有するかという點にかかつている。物を自己のものとして所有するか、公共のものとして管理するか、神もしくは主君のものとして保有するかは、心理的にも法制的にも同じではない；

(四)創造は物の活用を意味する。しかし物の活用は必ずしも物の私有を前提としない。；創造と呼ばれるものにも、確乎たる標幟がなくてはならぬ；たとえば戦争にも義戦と不義戦とがある。**“勝てば官軍”**という言葉があるが、勝つことと正しいことは、必ずしもつねに一致するのではない。楠正成の敗戦は、いわゆるモラリツシエ・エネルギーの薄弱を意味したのではあるまい(京都學派の世界史觀の中心カテゴリーを批判する意圖の拙論)。それと

同じく、「歴史的創造」と呼ばれるものも決して一義的ではない：單に歴史的必然への手段であるならば、どれほど物を所有してもよろしい、という意味において、何が聖賢たちは無所有を説きかつ行じたものではあるまい。要するに教授の説かれるところは、物の所有なくして人間の生活はあり得ない。所有そのことは悪ではない。それが悪となるのは、われわれの「創造的衝動」への妨げとなる場合である。従つて無所有の實踐は、たえず物を所有しつつ、しかも絶えずそれを創造のために否定するところにある、そしてこの否定は、歴史の根源たる創造的無につらなつてゐる、ということであつた。はげしい言葉を許されたい、もし基督にもよみせられ、ヘンリー・フォードにも喜ばれる倫理ありとせば、教授の無所有の倫理こそ、まさにそのようなものではあるまいか。(市川註。このあたり多少誤解がある。)結局、政治的實踐としては、公有の基礎概念と體制の上に、消費財の公正な配給、生産財の職能別による適正な供給を期すべきであり、個人の生活態度としては、この社會倫理に照應して、排他的な獨占慾を離れ、清廉奉公の精神を透徹實現すべきであり、そしてこの公私両面の實踐が、同胞と共に佛國土を建設せんとする行願に貫ぬかるべきであろう。そしてこの行願を根幹とする人倫的連關のうちに、いわゆる清貧は、その

價值・限度・位置づけを與えられるであろう。この場合、公有の「公」が何を意味すべきか、管理の倫理が何であるべきかは、佛國土建設の政治倫理の一環として、次に考えられるべき課題である。」(市川註。こんにちなお佛國土の建設という抽象論をもてあそぶ論者もあるが、日本國民の行願は皇國の建立でなくてはならぬ、という批評が、禪匠や禪論者のあいだから、聞かれるような時節に、その頃はなつていた。)

八月。第一次・第二次ソロモン海々戰。米軍ガダルカナル島上陸、米軍七萬のうち二千名戰死、日軍三萬六千のうち二萬四千戰病死。部落會・町内會等指導要綱閣議決定。食糧の買出しさかんとする。「八月三十日。晝頃より雨。新橋驛のあたり傘なき女多く徘徊するを見る。仙台邊にては、日曜日に釣竿を携え歩むものあれば、私服の憲兵之を捕え、工場其他の構内の草を取らせ、或は土を運ばせ、一日の賃錢八拾錢を與えて放免する由。」(荷風日曆)獨軍スターリングラードに突入、ソ連軍死守。國民會議派全印度委員會、英勢力に對し「Quit India」の鬭爭開始、(1)英勢力は即時インドから完全撤退せよ、(2)イギリスのインド支配の即時廢棄こそ、反ファシヨ戦争への協力を確保する道だ、と主張。印度共產黨合法化せられ、反ファシヨ戦争への協力と、勞農人民の經濟的・社會的要求の貫徹とを結合して、大衆指導にのりだす。



曉鳥敏「臣民道を行く」はいう、「十二月八日に米英に對し宣戰が布告せられ：俄かに日本中が明るくなつた：戰爭が始まつたと云うて、浮き浮きして喜んでいられるのは、不思議な位です、米英は失神状態になつてゐる（一頁）。親鸞聖人や法然上人が、西方の淨土を憧れておられる本願の大道は、その中心に、日本の惟神の國の憧れの現われであることが、仰がれる（94）。「西方の淨土がそのまま日本のお國」であり、「親鸞聖人の『和讃』には、『自業自得ノ道理ニテ、多劫衆苦ニシズムナリ』と教えてあります。自業自得には、自分で暗がりを作り、自分で障りを作つて、それに苦しんで居るのです。苦しまねばならぬことは一つもないのです：困らんでもよいのです：腹が空つたら水を飲む、それでは榮養分が無うなる、無うなつたら瘦せるだけ、瘦せたら死ぬ、死んで行けばよいじゃないか。」(104)「天照大御神様の御精神の中に、八紘を宇とすると云う御精神が成就して居る：今から成就するのではない：其の成就して居る日本の國に、吾々は生まれて居る：諸外國に對して戰さずするのは：成就して居ることを知らして上げる爲の苦勞なんです。」(108)「私は、その佛になられた釋尊のすがたの上に、英米に對して戰を宣して立ちあがつた日本帝國の雄姿を發見し、合掌恭敬の念を禁することが出来ない。」(173)「今

日の世界攪亂の本は、ユダヤ人だ、と云われるのも偶然ではない。」(221)「十二月八日眞珠灣の米艦隊に全滅的打撃を與え、二十五日香港が陥落、紀元節にシンガポールが落ちなければ、十五日涅槃會に落ちると思つていたら、十五日に落ちた。これはもはや「人間と人間との戰爭ではない：日本軍には眼にみえない偉大な力が加わつておる：神の御業」である。(231)「神が人類を淨化せられるみそぎはらいの活動である。」(233)「お勅語を飛行機で運んでいこう。お勅語を軍艦で運んでいこう。大砲でお勅語を打ち込もう。重爆でお勅語をひろめよう。」(243)「大東亞戰爭によつて、私共日本臣民は急速に淨化された。」(270)「生活禪談」はいう、「愈々夜明け前、大東亞戰と云う黒幕をソロッと下して見たらどうだ。憚りながら、陸軍も海軍も飛行機も、兎に角これは世界一だろう：だが誰が世界一なんだ。誰がこの戰に勝つたのか：みんな銘々人差指を、自分の鼻の上に乗せて御覽、これが勝つたと言つて貰いたい。：それが神様と續きの自己である。これを見失わないことこそ、我々人間最後の最高の使命である。」

拙稿「戰爭・科學・禪」(大法)は、まとまりのない雜文である。「肝腎なことは、知性を難じ知育を難じ知識層を難することではなく、知性をして知識層をして、眞

に健全な行動に向わせるような倫理を確立し實踐することである。破邪顯正ということが、多少とも戦いを意味するとすれば、知性もまたその根柢に、このような戦いへの意欲を孕んでいる。知性は必ずしも冷淡ではなく傍觀的でもない；上意下達のみあつて下意上達のないところに眞に健全な政治は行われ難いであろう。もし時の政府が野に在る眞摯な知性の聲をきかず、却つてそれを壓しつけ踏みじるとするならば、知性は歴史に對して、傍觀的地位に立たざるを得ない；戦争に對する深い懷疑を惱んだことのないものは、眞に誠實な精神ではない、とさえいふことができる。；このような心にとつて、暴力殺戮を無雜作に認めることが、どれほど困難であるかは、論ずるまでもないところである。トルストイやガンディの無抵抗主義は、この嚴肅な道義的自覺に根據を置いている。；いわゆる絶対否定即絶対肯定の見地において、歴史的現實を肯定するにしても、それは決して否定の契機を撥無した、只の肯定ではない筈である。；禪者の大機大用が發動するためには、内に思辨的なものが消化されていなくてはならぬ；一切の鬭争を以て非人道的な罪惡だと見るが如き平和的博愛主義は、生の實相を知らぬ道學者的感傷である。；しかしそれかといつて、われわれは戦争至上主義をそのままに承認するものではな

い；限りなく敵を求めて戦うことが、人生の眞意義、究竟相ではない筈である；われわれは今次の大東亞戦争が、決して戦争至上主義に立脚したものでないことを、銘記しなければならぬ；『東亞ノ安定ヲ確保シ以テ世界ノ平和ニ寄與スル』と仰せられた大御心に沿ひ奉るものにはかならない；戦争がもろもろの高貴なる徳をよびますことも事實であるが、またもろもろの不徳を誘發する事實をも、看過すべきではない。遺憾ながら、われわれはこの種の戦時不徳義に、いくたびか眉をひそめつつある。；協同獻身の態度が、眞に高貴であるか否かは、ひとえにこれを統率する戦争が眞實の義戦であるか否かに懸つている。われわれはガンディの『非協同運動』の倫理的根據を洞察すべきである；獨逸もまた『永久平和』の哲學（カント）を持つた時代もあつたのである；しかしわれわれは暴力を全面的に否認しようとは考へない。もし一切の暴力を反倫理的なるものとして斥けるならば、却つて爛熟増大する社會惡を、喰ひ止めることは至難であろう；結局、多數者に眞實の幸福をもたらし、眞實の幸福を保證するということ；戦争の倫理はここにその基礎をおかなくてはならぬ；戦争内の道義は、その戦争自體の道義性に基礎づけられるのでなければ、盜賊團の仁義とえらぶところがない；

自らを眞實に解放し幸福にする戦いは、嚴肅な意味において、敵をも解放し幸福にするような戦いでなくてはならぬ。防衛のための戦いが認められると云うても、むしろ亡び去つた方がましなような體制と文化の國であるならば、そのような國家の防衛は、義戦の名に値しないであろう。自己および他己の身心をして脱落せしむ、という言葉がある。眞に嚴肅な戦いは、敵の側における悪しきものを克服する戦いであるばかりでなく、また味方の側の悪しきものを克服する戦いでなくてはならぬ。防衛と懺悔と解放とが、一線につらなるような戦いこそ、聖戦の名に値するであろう。…もつぱら他國を救い他國を樂土とするための戦いというものはありえない。そのような利他的名分はひとつの麗句にすぎない。…勝つときだけ禪があるのではない。負けるときにも禪がなくてはならぬ。現に戦鬪に従事している兵卒に向つて、何のために闘うのかと問うことは、無意味である。かれらが現に入りこんでいる状況下においては、ただ戦うより外に道はない。何のために「も何もない、いわば是非無く非無しである。併し個々の戦鬪を誘導し、個々の兵卒を動員しつゝある全體としての戦争そのものには、眞にゆるがぬ名分があり倫理がなくてはならぬ。戦いは聖戦でなくてはならぬ。是非を忘れた個々の戦鬪は、灼熱の

短時間にすぎぬが、戦争そのものは評價反省を容れる長期の行動だからである。…われわれは曾て禪の倫理における重層性—倫理的構造と超倫理的風光との連關—を明らかにしたが、戦争もまたこのような二重の態勢を、整備し實踐することによつて、眞に善くかつ逞ましき建設性を獲得し得るであろう。順逆ひとしく佛道を成じ、自他同じく佛土に赴むかん、と古人は説いている。」

九月。青壯年國民登録實施。細川嘉六「世界史の動向と日本」(改)發禁。特高警察は細川を逮捕しようとしたが、細川論文に共產主義を見いだすことができなかった。そこで細川が去る七月、法事のため富山縣泊町に歸省、

自著「植民史」出版記念の意味を含めて、改造、中央公論の社員を招いて清遊した時の記念寫眞を入手、これを日本共產黨再建の祕密謀議とし、關係者を逮捕(泊事件)<sup>64</sup>。座談會「近代の超克」。知識人の抵抗を介しての戦争協力の努力として、大きな影響を青年知識層に與えた。参加者、小林秀雄、河上徹太郎、龜井勝一郎、三好達治、中村光夫、林房雄、西谷啓治、鈴木成高、下村寅太郎、吉滿義彦、菊池正士、諸井三郎、林房雄、津村秀夫。

十月。汪兆銘訪日。重要物資強制買上斷行。高山岩男「歴史の推進力と道義的生命力」(中央公論)高楠順次郎「大東亞共榮圏の文化振興と宗教政策」によれば、「凡て背

景のある宗教は、共榮圈の存立に於て、最も注意を要する。米國教會の背景ある新教が、何れの國に行つても、教會において、民主主義を説きつゝあつたことは、周知の事實である。日本に於ても、これが實際に行われて居たのであるから、驚ろくの外はない；かかる背景ある宗教には、殊に注意を要する。背景の有無に係らず、宗教に完全の自由を許すべきものではない。」

拙稿「職能の倫理」は、「職域における職能を通しての奉公」という、當時の「臣道實踐」の項目との連關における評論であり、引用すればつぎの通りである。

「ペルソナにどのような種別があるにしても、それらは役割として職能として、多少ともおおよの性格をもつことにおいて一つである。ペルソナは個人的な意慾を制肘するような、もしくは或る種の要求を私的なものとして規制するような、組織的連關をもつてゐる。ここにペルソナの嚴肅性がある。しかし公とか嚴肅とかいうものは、必ずしも眞に公正だとは限つてゐない。時にはそれが他の私の擬裝であつたり、威嚇もしくは畏縮の擬態であつたりする。ペルソナは正しき倫理に基礎づけられていなければならぬ；しかしペルソナが人間のすべてではない。面と制服を着けない人間、ペルソナに盛り切れない人間性がある。菊を東籬の下に採り悠然として南山

を見る、というのは、多少ともペルソナを離れた人間である。：雪峰問僧、闍黎名什麼。曰玄機。師曰日織多少。曰寸絲不挂。この僧は後に雪峰に打たれてゐるが、それはともかく、日々ペルソナの多彩を織り成しつゝ、しかもそこに寸絲をかけざる風光がある。この清明こそ、やがてペルソナの倫理性を吟味する所以のものである。赤肉團上一無位の眞人在り。無位の眞人はもはや單なるペルソナではない。却つて一切のペルソナのなるものを超えたものである。世間虛假という言葉があるが、無位眞人の見地よりすれば、世間のペルソナは假面であり、芝居にすぎないとも言われ得る。希臘人は俳優を *Hypocrites* と呼んだが、この言葉が新約聖書において *Hypocrite* の現在の意味、即ち偽善者の意味に轉化せられたことは偶然ではない。：

今日では個人とか人間とかいうものはもはや存在しないと言われる。われわれの生活は、われわれの思考をも含めて、くまなく國家によつて統制せられ、秩序づけらねばならぬからである。この統制は、一切の生活部面を、ペルソナとして組織することを意味する。いわば良寛も桃水も今日では紛れもなきペルソナとして、公職的存在たることが要求せられる。無位眞人の公職化が求められる。近年、佛教教理精神の根本的變革と呼ばれるものも、

この要求への應答だと見られよう。しかしこの事態は、これまで辿つてきた論理と、どのような連關をもつてあるうか。雲門曰、世界恁麼廣闊、因甚向鐘聲裡披七條。

無門曰、大凡參禪學道、切忌、隨聲逐色。無位眞人が自らペルソナへの道を急ぐことは、度生の行願にいそむむかに見えて、實は聲色に隨い、十二時に使われて本來の面目を失い、却つて眞實の行願を忘却することではないのか。新しき世代の鐘聲に應じて、新しきペルソナを着けて出頭するのは、因<sub>レ</sub>甚であるか。

鐘聲裡に七條を着けるのは、もとより無作の妙用であるが、この自由が生れるまでには、鐘聲裡に七條を着ることの意義が吟味、認容せられてゐる筈である。自由にして而も節にあたる行爲は、常に適正な吟味を前提とする。そうでなければ、それはひとつの氣まぐれであるか、または他律的なドクサの行動にすぎず、したがつて眞の自覺と内面的必然を欠く意味において、ひとつの物眞似であるか、または或る種の阿附であろう。…今はその時ではない、とかいうような把住の眼識を欠いて、どうして隨處に主であると言ひ得よう。東洋の人間を久しく支配した汎倫理的思考は、自然を敬愛すべきものに美化深化したとともに、他面歴史的必然を自然的必然の如くに感受せしめたことも、その事例に乏しくない。もし東洋

的深玄から區別せられる東洋的Ⅱ中世紀的蒙昧ありとするならば、それはこの事情のうちに淺からぬ素因をもつと言へるであろう。鐘聲七條の話頭に關して、古人は「お手が鳴ればハイと應じて出る」と示している。聲に應じて出るのは、ひとつのペルソナを行ずることであるが、このペルソナに上記の自主性がないとすれば、それは單なる土偶である。…すべてものに眞によきペルソナを與えらるとともに、すべてのものがその與えられたペルソナにおいて、莞爾として純一無雜に生を遂げるような倫理を、確立し宣布し、それに適應し、それを支持する體制を整備することが、政治倫理の核心でなくてはならぬ。いわゆる法任法位、世間相常任の世界は、ひとつの美しき諦觀であるが、さらにそれは、凡ゆる生活圏の成員が、主觀的にも客觀的にもそのペルソナにおいて、眞によく且つふさわしき處を得る、理想的世界だと、解釋することもできるであろう。隨時隨處の好日において、萬人のためのよりよき好日を行願することは、ペルソナの倫理であるか、それともペルソナを超えた倫理であるか」十一月。第三次ソロモン海々戰。大政翼贊會、戰場精神昂揚國民運動基本策を決定。興亞鍊成所開設。拓務省廢止、大東亞省設置。大東亞文學者大會。神道、佛敎の管長ならびに敎團統理者を宮中に召し、橋田文相待立の

もとに拜謁を仰付、非常時の思想、善導に盡力すべきことを詔す。各宗管長、末寺に宣示を出す。

紀平正美「禪の論理若干」(鈴木・古田編「盤」は紀平一流の「なるほどの論理」を用いた、うなずきにくい筋のもの。まず梁武帝と達磨との商量をとりあげていう、易姓革命のたえぬ支那においては、儒敎の道は個人の保身・處世の術として學ばれることになり、眞に道への歸一隨順とならず、したがつて安心をもたらすことがなかつた。この弊を知るゆえに、梁の武帝は佛法を以て國を組織し統治しようとした。——この理想は、聖德太子の「篤敬三寶」の佛法擧場により、日本において始めて實現した。——即ち、武帝は佛法を以て修身・齊家・治國・平天下の用に立てようとしたのだ。この經綸にこたえる「第一義」を問うている武帝に對して、單なる安心法門を以てするのは的はずれである。不契ということにならざるをえぬ。そこで達磨も退いて自己反省に入つたのだが、慧可の嗣法に見られるように結局個人的安心の世界を出ることがなかつた。臨濟に至つて、儒の人倫と禪との統合の上に、佛法を具體化し得たが、修徳が個人の上に限られたために、禪機に傾き、末流の奇行禪を生む契機を作つた。日本の場合はどうか。夢窓疎石は菊池氏の勤皇精神を作つたといわれるが、しかし反逆者高

氏をも作つたのである。この禪と勤皇との間には必然關係はない。禪が眞に日本精神に參與したというならば、それは日本化した禪の場合でなければならぬ。この日本化の契機をなすものは、道元禪である。道元の「佛道を習うと云うは自己を習うなり。自己を習うと云うは自己を忘るるなり」の提綱は、威儀即佛法の理を介して、日本的人倫に歸一し、滅私奉公の佛敎的現成となるはずのもの。このようにして「佛道無上誓願成」は、「皇道無上誓願成」となる、という。紀平は、ここに大政翼賛の道と安心の道とが一體化する、とみているのである。この紀平哲學を完全に具體化したものが、「軍神」杉本五郎の「大義」禪であつた。(拙著「般若經」第二章參照)

「華人勞務者移入に關する件」閣議決定。閣僚は東條首相兼陸相、橋田文部、賀屋大藏、岸商工、青木厚生、井野農林など。中國の良民約四萬を、強制的に日本内地に連行、死者六千八百餘名、行衛不明八十餘名を出す。丹羽文雄「報道班員の手記」(改)發禁。北原白秋歿。スターリンググラーブ反撃始まる。連合軍南アフリカ上陸。獨軍フランス全土占領、フランス全艦隊ツローン港において自爆。

十二月。法令を以て十二月八日を大詔奉戴日と決定。大日本言論報國會發足、會長徳富蘇峯、事務局長鹿子木

員信、「日本世界觀確立と國內思想戰遂行」に狂奔。「歴史學研究」休刊。美術家、作家、戰艦獻納運動を開始。少年ちかひの大會、東條首相講演。思想研究所開設。ガダルカナル島撤退作戰開始。滿州國基本國策要綱發表。十二月初五。醉客の語るをきくに、高島百貨店にて、奢侈禁制品なる繪模様金銀刺繡の衣類を調製中の由、刑事等探知し取調べしに、注文主は東條首相夫人、令嬢とわかり、刑事等驚きて引込みしと云。十二月初八。風あり、庭樹騒然。頃日市中街燈を點せず。道路暗黒歩むべからず。横濱港内怪火爆發。碇泊の獨逸軍艦燒没の事ありし爲と云。(荷風) シンガポール、華僑五千虐殺。パターソン、死の行進。(日曆) 泰・緬鐵道工事、捕虜虐待、十五萬のうち十萬死亡。

大阪毎日新聞社編「日本佛教概論」の「天台」(田村徳海) はいう、「大自然、宇宙の自然の眞理、その眞理を體得すると云う、それが自覺である。その自覺さえ持てば、この身そのまま佛様であります(167)。敵國となつておるものは、この眞理と云うものの明がない(168)。滅私奉公…公は絶対の眞理、私の方は煩惱の塊…私・氣儘の方が今日敵になつて居る。公の眞理の方が、日本の立場になつて居る(169)。日本の國體は世界無類の國體、絶対の眞理であります(170)。眞理ですから勝つのが當然(169)だが

放つておいてはいかぬこともこれも當り前、今の大自然の眞理を體得して行く(170)。「眞言」(金山)によれば、「佛教は無我の理を説き、己を捨てて大君に一切を捧げつくす要諦を明すものであります。又華嚴宗の一即一切、一切即一の法門から、上御一人に捧げつくす眞理を説かれる人もありますが、眞言密教にては、はれわたりたる大空の中に、月の出でた世界、さきに申しましたように、心月輪に住することを明しますが、清らかなること青空の如く明るきこと日月の如き中心に住して、眞に忠誠を盡すところに、興亞の大業が完遂せられると思ひます。」

「華嚴」(山上)によれば、「自然の大道に順じて行く、自然の大道に背かぬ所を、孝と申して居ります。法界縁起、事々無礙の教理を、親子の關係に持つて來ると、子は親に孝道を盡くすということが、即ちこの華嚴の眞理なり、大宇宙の眞理をハッキリするのだ、ということ…(105)。法界縁起は、みんな全體が一族となつて和合することを、大和合と申す…いわゆる大和の精神が、この法界縁起から出て來る。この大和の精神を全般に向けて來ますと、この宇宙全體が一族でありますから、八絃一字という思想が出てくる(107)。この盧舍那…この蓮瓣の十方世界の中心に、聖武天皇様が坐つてござる…と御覽になつたら宜しい。今日の陛下が、この八絃の上に御立

ちになつて下さる…それを大佛殿で表徴されて居るのであります(108)。」

東京帝大佛青編「國家と佛教」の「日本國體と日本佛教」(林屋友)によれば、「華嚴哲學を背景とする」と、一點の矛盾もないように之(天皇即國家)を説明し得る(148)。伊藤公の立法精神には、明らかにこの天皇即國家説が、働いて居つたことは、同公の「憲法義解」にはつきり出て居る(148)。それが美濃部憲法の如きものを一時跳梁せしめた(149)。」

「『精神の世紀』のために」(吉濂彦)はいう、「私はこの大東亞戦争緒戦において、最も直接に『戦争』を自己奉獻の『祭り』として、何か莊嚴な一種の贖罪的行動として、感じて居る氣持を…とにかく私は、大東亞戦争開始と共に、『東洋と西洋』を通じて、新しき『精神の世紀』に臨んで来るのを、豫感したのである。西歐的立場では、『近代の終末』、『近代の超克』という問題で、意識されよう。東洋では、『古代的なるもの』と、『中世的なるもの』と、『近代的なるもの』とは同時存在的…東洋西洋を通じて、現代文明への内在的危機批判…『精神』の名に値する人間價値の實現は、『犠牲』と『祈り』の苦行なしではありえない。…魂が機械を支配し、貧しさが物質を支配し、祈りが行動を支配せねばならぬ…世界

史の闘いは、人間相互の闘いであるよりは、人間と惡魔との闘いである。」

J. B. Vercors, *Le silence de la mer.* (抵抗文學の母胎 *Éditions de minuit*) (深夜叢書)の第一冊として非合法出版。なお一九六〇年『深夜叢書』社編集長ジェローム・ランドンはサルトルと共に、〇二一人の宣言〇即ち〇アルジェリア戦争徴兵忌避の權利に関する宣言〇に署名し、一時逮捕された。ヴェルコールも署名。Sartre, *Les monches.*

A. Camus, *Le Mythe de Sisyphe.* (27th. ed.)  
E. Alain, *Vigiles de l'esprit.*  
A. Camus, *L'étranger.*

F. M. Foster, *A Passage to India.*

K. Barth, *The Church and the Problem of Our Day.*  
Heidegger, *Platons Lehre von der Wahrheit.*

R. H. Blyth, *Zen in English Literature & Oriental Classics.*

郭沫若、歴史悲劇「屈原」「虎符」を書き、反動に抵抗する民族精神をうたう。リヒトホフマン「支那」(一)邦譯(『China』, 7 vols, 1897—1911) 森田克己「東洋的生活圈」。高田保馬「民族論」。高坂正顯「民族の哲學」。柳田國男「國史と民族學」。高山岩男「世界史の哲學」。大串夷代夫「大東亞戦争の世界史的意義」。南原繁「國家と宗教」。内閣情報局「思想戰讀本」。田中智學「思想國防の眞髓」。田中晃「生の哲學」。紀本正美「なるほどの哲學」。利根川東洋「生みの哲學」。和辻哲郎「倫理學」(中)。長谷川如



是閑「續日本の性格」。風早八十二「日本社會政策史」。鈴木大拙「禪思想研究・第一」、「續日本文化と禪」(邦譯)。

一九四三(一八)。一月。南京政府(汪政)と基本協定。南京政府米英に宣戰。皇民鍊成の學制改革勅令。文部省内に民族研究所設置(所長高田保馬)。東方會中野正剛「戰時宰相論」(朝日新聞(元旦號))において南宋の忠臣岳飛の「文臣錢を愛まず武臣命を愛まざれば、天下平ならん」を引いて、非常時の宰相は「謹慎にして廉直たれ」と論じ、暗に東條首相を難詰し、發禁となる。高坂、西谷、高山、鈴木「總力戰の哲學」。河上肇「自叙傳」起稿。ルーズベルト、チャーチル・カサブランカ會談。

「大東亞圈内に於ける諸宗教の統一」(井上哲) はない。「既に我が日本に於て、儒教だの佛教だの基督教だの回教だの、いろいろな外來の宗教だの徳教があるけれども、みな皇道によつて律せられている。それ故に自分は、アジアの諸民族、諸宗教は將來、皇道を以て之を律する外無いと思う。」「大東亞戰下に於ける宗教生活の國家的意義」は、い、大東亞戰爭は、その本質に於て、思想戰爭であり、世界觀の戦いである：人類文化の未だ達し得ずして、今始めて達しようとしている高き理念、皇道文化が、未だ低劣なる民主主義的、個人主義的世界觀に對して、啓蒙指導の戰を宣したのである：去る九月九日ゲ

ツペルス獨逸宣傳相は、週聞新聞「ダス・ライヒ」紙上に、「ドイツ人よ、あまりに公正なるなかれ」と題する論文を掲げた。その思い切つた論斷は、内外に非常な反響を生んだ。その主眼とする所は、ドイツ人一部に存する「正義の過剩」を清算し、敵に對する憎惡をヨリ強く燃して、先ず勝つことを目的として、全力を集中すべきことを、基調としている。戰爭が勝つか負けるかの土壇場に押し詰まつているとき、いまさら「祖國の戦は正しか正しくないか」など、戰爭目的を論議するドイツ人一部、強調したのである。國家の自己目的々存在性の當然の形態である：身を殺して善を爲すべき個人道徳との、根本的相違が此所に在る。理念のため、正義のためにのみ戦うのであつて、政治的、經濟的目的に向つて戦う事を欲しない、と稱する文化感傷主義者は、ゲツペルスによつて警告されたドイツ知識階級の、國家意欲薄弱者と同じ人々である：國家の場合には、飽くまでも自己主義に於いて實現さるべきである：飽くまでも自己の立場を目的としながら、その主張に於いて、然も自國のみならず他國の繁榮を、共に生かして行くところに、國家道義の特殊性がある。吾が八紘一宇の皇道理念は、この國家道義の顯現である：武力戰の目的が皇道開顯、ヨリ高き

世界觀の指導者である以上、思想戰こそ大東亞戰の本質でなければならぬ。」(市川註。戦争の正否を論ずることを否定しながら、聖戰を主張するのは矛盾である。)

「刻苦光明」はいう「昭和十六年の十二月八日、例年の臘八大接心を終つて、想いを遠き三千年の昔と、萬里の波濤を距てた、印度佛陀伽耶なる金剛座上の釋尊の上に走せ居た時、ラジオに依り：敵米英兩國に對する宣戰の詔勅御下賜の報を受けて：必勝、東洋永遠の平和建設、莫妄想！：古人も參禪は須らく三要を具すべし：と云つて居る。今や皇國臣民は、一には如何なる長期戰にも堪え忍ぶ大乘根氣、二には大東亞共榮圈確立と言う大憤志、三には自己の戰時生活はこれでよいかという大疑情を、胸間に掛在して、牝鶏の卵を抱くが如く、猫の鼠を捕うる時の如く：日々夜々に刻苦して、努力しなければならぬ。」

「禪で肚を鍊る」は傳えていう、「臨濟宗愛媛教區報國會にありては、昨秋愛媛縣下の産業報國會、商業報國會員三百名を一堂に集めて、知事を講師に、また宗門からは足利紫山老師(前管長)後藤瑞巖老師(臨大學長)を講師として、非常な成果をあげたのに鑑み、縣當局としても、大いに時局下の禪鍊成を絶對緊要として、今度は地方の翼贊指導の中心體たる、市町村長三百人を集めて、愛媛縣

大洲町如法寺を會場として、一月廿五日より廿七日まで、禪の鍊成を行つた。講師は大本山佛通寺貫主山崎益洲老師で、老師は手鹽にかけて養成した、軍神杉本中佐の遺著「大義」を講本として、提唱した。「未曾有ノ國難ニ際シ、安政ノ舊記ニ則リ、波切不動ヲ奉請シ、敵國降伏ノ護摩奉修方依頼候事。昭和十八年一月 近衛文麿 高野山金剛峯寺衆徒中」

「彈巢」の著者(京都帝大文學部梵語學)によれば、「世の中に本當に正しいものは一つきりしかない：我が神勅に發している肇國の精神というのがそれ：その神ながらの御現身が、畏くも天皇陛下にまします：世界萬民がその光りに被われて行く世界が八絃爲字：それを阻む者を破るのが聖戰：ここに捨身歸命の眞義(253)：その正しき認識が自覺であり、正覺なのだ。正覺を梵語で言えば佛であり：佛典のすべては、あらゆる角度からそれ(八絃爲字)を開陳したものの(254)：本當に宗教のわかつている日本人なら：天皇陛下萬歳を稱えて靖國の神となる：それが祖師達の説かれた眞理の顯現：その出来ない人はいくら口に宗教を説き、いくら自分は宗教によつて救われているなどと廣言しても、それは結局何一つ判つていない：概念の遊戲にしか過ぎない(255)：神徒も佛教徒も基督教徒も、皆最後は天皇陛下萬歳なのだ。：それが信教の自由

を許された我日本人の行くべき道：かつて靖國神社の参拜を拒否したような基督教徒は非國民であるばかりでなく、基督その者の偉大なる愛さえ知らない馬鹿者なのだ：吾々の宗教は生きたものでなくてはならぬ。」(264—266)

二月。ガダルカナル島撤兵。スターリンググラード、獨軍降伏。フランス抵抗運動全國評議會C・N・R (Comité national de la Résistance) 結成、六抵抗團體、六政黨これに参加。ドイツ抵抗運動「白薔薇」Die Weiße Rose のシヨル兄妹ら處刑。「われわれは沈黙しない。われわれは諸君の痛む良心である。白薔薇通信は、諸君の安靜を奪う！」。ガンジー斷食。三木清「比島人の東洋的性格」(改)「この論文は、ファシズムに對する抵抗要素を欠き、ファシズムを一義的に承認している：かつて治安維持法の適用をうけたものが、事あるごとに求められた所感を、彼は比島從軍直後に求められたのであろう。従つてこの論文は、彼にとつて一つの『踏繪』であつた。彼はこの『踏繪』と共に、ペンを折ろうと考へたのであろう。そしてここで初めて、彼は青年時代からひらかれてきた、親鸞の研究に深くはいつて行く。」倉田百三歿。同じく親鸞に傾倒した倉田はいう、「日本主義に轉向せりと云いながら、日本民族の神話への尊崇と愛護の感情を、持つて居ないものがあるとするならば、

それは轉向者と云うに價しない。：轉向者の一人三木清は云う、八紘一字とか祭政一致とか云う理念は、日本民族の根本思想であつて、何人も異議はない。これは思想と云うに價しない。思想の名に價するのは、如何にしてこの根本思想を達成すべきかの具體的理論である」と。併し八紘一字とか祭政一致とかの神話的觀念を、神棚の上にかたづけ置いて、いわゆる思想の名に價する理論的研究をされてはたまらない。：私の希うところは：彼等が心からなる日本皇國の臣民として、自らを光榮と感ずるに至らんことである。」

「佐藤通次など、日本精神は見るでなく聴くである、天皇隨順だと、暗に私を非難する様だが、私の見るといふのは、佐藤のいうが如き淺薄の意味ではない。」(西田多郎、瀧澤)「我と汝との關係が、その間に神の媒介を入れて來なければならぬ、と云われるのは私も肯定する。而して我々が歴史的個物として、眞の個人的自己となることが、絶対矛盾的自己同一者としての、神の自己表現と結合することである。我々の自己は、絶対矛盾的自己同一者としての、神の自己射影點である。」(同、山内)「君のえはがきの、億劫相別而須叟不離、晝日相接而刹那不接が來て、丁度私が今書いて居る矛盾的自己同一の論理を、そのまま言い表わしたものの如くに感ぜられ、絶対の

宗教即ち絶對の論理と感じました。私は人の考える如く唯歴史哲學をかいて居るのではありませぬ。」(一あて 同久松眞日本人民解放連盟結成(延安)。

「決戦必勝の禪道的要訣」はいう、「雪深い静かな山寺で、禪道修行の會が開かれた。参加をゆるされたものは二十餘名。會期は五日。そこでみづちり修行して來た青年某の言葉である——禪道修行の開かれた夜であつた、老師の室に入つて指導を請うた、老師は公案を工夫するがいゝといつて、じいつと私を見詰めていられた、そして莊重な、實に莊重な音調で申された、『米國の軍需工場を撃滅して來なさい』と。…驚き・懼れ・疑い・惑いのただ中にあつては、そこに生れ出る總てが、驚き懼れにまつわれ、疑い惑いに歪められるために、それが人間らしいものであるよりは、惡魔らしいものとなるので、滅茶滅茶になつてしまうのである。禪家の先達が、何をさて置いても、人々をして驚き・懼れ・疑い・惑いから脱せしめようとするのは、これがためである。青年某を指導した老師が、米國軍需工場を撃滅して來いといつたのも、青年某が軍需生産力や兵器に對して抱いてゐる驚き懼れ疑い惑いを、脱却せしめようためである。」

「皇民鍊成の基底」によれば、「我等曹洞一宗一門の團結を、いよいよ強靱ならしめる鐵筋、それは申すまで

もなく、佛祖正傳の信行であります。しこうして我等は日本人であります、皇民であります、その眞義に徹し使命に徹するの道は、定まつています。…日本人たり皇民たるの眞義に徹する所以の五要綱を、いよいよ明らかに我等をして體得し行取せしめる、宗門の信行は、左の如くであります。

#### 國體明徵歸依三寶

皇運扶翼證上妙修

敬神崇祖師資相承

皇民鍊成身心學道

皇民生活行持報恩

「國民鍊成運動の展開」によれば、「指導と云ふことは、實際容易ならざる大事業であつて、相應の力量があつても、指導的の感化力の薄いのもあれば、迫力の足らぬものもある。禪門の修行に於て、正師を求むることの必要が説かれてゐる…『學道用心集』に『參禪學道は正師を求むべき事』の條に：又同條に正師の本料として、  
『文字を先とせず、解會を先とせず、格外の力量あり過節の志氣有りて、我見に拘らず、情識に滯らず、行解相應する』を尊しとしている。此の『格外の力量と過節の志氣』というのは、現下にとつて言えば、『一死報國の決意憂國の至誠』であろう。皇國に身を享け得た、のみ民

われ等の感激に満ち、勝ち抜かねば止まぬ意氣に燃えて、そこから流露する指導でなければならぬ。」「適禪護國と坐禪體操」によれば、「防空には恐怖心があつてはならぬ、との東京市防衛局長菰田中将閣下の御意見で、小柄は、先ず立足立區の各所で開設される、東京市防空講習所で、此の精神體操の講演と實地指導をしており、尙之を他に及ぼしたい念願である。元來我が國では、禪の爲の國家という考え方は許されぬ。どこまでも國家の爲の禪でなくてはならない。然らば、完勝の爲にお役に立つ禪の形式に重點を置いて、之に全力を盡くすべきではないか。』

三月。大阪商大名和統一ら檢舉。谷崎「細雪」(中)連載禁止。東京選出赤尾敏代議士「忠靈公葬ニ關スル請願」趣旨説明「英靈を反國體的な宗教の儀式によつて慰靈するのは適當でない。此の忠靈公葬に關する請願は、國體明徴、國教確立、宗教維新の導火線になる、重大な請願である。此の世界皇化の精神からみて、かような宗教を放置することは宜しくない。天理教徒も佛教徒も基督教徒も、死ぬ時は「天皇陛下萬歲」といつて死ぬ、「南無天理王命」「南無阿彌陀佛」「アーメン」などいつて死ぬのではない。天皇を現人神として天皇に歸一し奉るのだ。」大日本佛教會、公葬問題に關し再聲明(第一回、は二月)、

同時に「遺族の意思を尊重せよ」という趣旨の「戰時將兵公葬に關する請願」。全國最初の龍谷大學「興亞科」、文部省より認可、西本願寺立京都女專では、東亞に送る女性文化の戰士養成のため、定員五〇名の東亞科設置を宗會において決議、四月から龍谷大學などに特設される「興亞科」と、ほぼ同じ學科内容で發足することになった。

「戰鬪の王三昧」はいう「從容錄三十四則に、風穴垂語：とあるが、一億國民總に國家と同居死するの覺悟を要する、今日より急なるはない：お互に參禪辨道に精進し、戰鬪の三昧王三昧に邁進努力したい。」「日々決戰の禪道的反省」によれば「何が眞か何が善か、それを探つて而してそれをやるのでない。自分自身が今ぶつかつてゐる處に即し、境遇に即し、事情に即して、勇猛果敢に、何が何でも、やつてやつてやり抜けばいゝのである。やつてゐると、何が眞か何が善かが、しみじみと身に徹し心に徹して實證されてくる。：祖師西來意にしても然うである。」岸澤惟安「戒法のお話」、不殺生戒などの條下で戦争を支持した。「尊兄の御紹介にて來訪せられた代議士が、私に、國體ということを書けとすゝめられ、其外にもすゝめる人あるにより、今私はそういう問題を、書くまでに至つていませぬが、後日のため、一案として

一寸原稿紙五十頁のものを書いて見ました。これは極めて不完全のものなり、且つ私を陥入れるべく狙うもの多き時節故、今發表する考は御座いませぬ。併しこれを謄寫版かタイプにして、少數の人に見てもらいたいという氣も致します。」(西田幾多郎)  
(長田新あて) 高山岩男「總力戦と思想戦」(中)

四月。連合艦隊司令長官山本五十六戦死。國策研究會・大東亞問題調査會編「大東亞共榮圈建設對策案」第一編「基本構想・總論」發表。文部省指導の下に、皇國基督教確立を期して、基督教團の教師養成機關統合刷新。大政翼贊會、公葬問題を政府に上申せずと決定。東伏見宮邦英伯、天台座主に就任決定。龍谷大學、興亞科設置、全寮制、四〇名。

「必勝の信念と禪」によれば「ドッシリと凜然と坐禪することである。心を丹田に据え、*「肚でゆく」* 鍊成をすることである。：橋田文相(註、正法眼藏釋、四卷の著者)は、戦時下の思想對策について、：*「いかなる思想を謀略的にもつて來ようとも、それを跳ねつけることが根本對策である。それについては國體の本義に徹すること、肇國の大精神を實際に身を以て體驗することが根本：あらゆる學術を、日本の立場において把握することが最も必要である。」*と確乎たる信念に住すべきことを、力説されている。：

敢闘精神は禪である。「八風吹けども動せず天邊の月」、これは禪的境地を明示した句であるが、思想謀略を跳ねかえす必勝の信念は、禪によるのが最も捷徑であり又確實である。「個物と個物との相互關係は、表現ということの外にない(私と汝との關係の如くに)。而して無數の個物と個物の相互の表現的關係を統一するものは、又絶對的の一者の自己表現というものでなければならぬ。これがライブニツツの神に相當する。右の如き關係は、豫定調和の如き要請ではなくして、個物概念の論理的必然に基礎付けられたものである。これは却つて論理の根本形式となるものである。」(西田、末編) 清水幾太郎「敵としてのアメリカニズム」(中) 怨一あて 伊藤古鑑「榮西」(雄山) 反ナチ抵抗組織の神學者ボンヘッフアーら逮捕。

五月。アツ島守備隊全滅。御前會議、大東亞政略指導大綱決定。國民總動員實施要綱決定。勤勞報國隊整備要綱發表。戦時食糧自給對策發表。日本美術報國會結成。青年學級讀本に杉本中佐「大義」を引用、劍禪一味の精神を鼓吹。「宗門奉還とその再生」は、東伏見宮を天台座主に迎えることは、佛教界の慶事であり、今や(一)教團宗門の國家奉還、(二)佛教々學宗學の徹底的皇道化、(三)教團寺院の神祇奉齋を實踐すべき秋である。「佛教の國家觀・戦争觀」は、佛心に立脚する正法國家の

淨佛國土成就衆生のための折伏戰こそ聖戰である。聖戰は神の戰い、佛の戰いであるが故に、必然に神佛無限の冥護が加被する：折伏と攝受、討伐と宣撫とは、八紘一字の兩翼である。」「民族發展の合理性と非合理性」によれば、「廣大な支那大陸の無限に等しい愚民を相手にして、政治外交の全方針を理解せしむることは不可能（知らしむべからず）である。：唯全民衆が指導者に絶対の信頼を抱き、指導者の爲すことに誤りないと、依りかかつて居る氣持を持たしむるならば、正に政治の理想である。理論を超えて絶対信頼、承諾必謹、絶対他力の精神である。此所に政治の理想がある。」

「世界新秩序の原理」(西田幾多郎)の「要旨」にいう、「眞の世界平和は全人類に及ぶものでなければならぬ。然るにかゝる平和は、世界的な使命を自覺せる諸國家諸民族が、先ず地縁及び傳統に従つて、一つの特種的世界即ち共榮圏を形成し、更に共榮圏が相協力することによつてしか、到達されない。而してかかる共榮圏の確立、及び各共榮圏の協力による世界的世界の實現こそは、現代の擔つている世界的課題である。大東亞戰爭は、東亞諸民族がかゝる世界的使命を遂行せんとする聖戰である。歴史が炳として示すが如く、飽くなき米英の帝國主義は、東亞諸民族を永く足下に蹂躪して、その繁榮を

阻止し來つた。この米英帝國主義の擊滅、根絶を期して結束する以外にない。すなわち、大東亞戰爭を完遂して東亞を保全し、東亞共榮圏を確立して、共榮の樂を偕にする事が、現代東亞諸民族の第一の歴史的課題である。今や志を同じうする獨、伊、其の他の諸國は歐洲の天地に新秩序を建設すべく勇敢に闘つて居る。亞歐兩洲に於けるこの二大事業の完成する秋、眞の世界平和を招來すべき世界的世界は實現するであろう。東亞共榮圏を通じて、世界的世界を實現すること、これが東亞諸民族の第二の歴史的課題である。」「京都學派の國家哲學における、事實即當爲の論理をとり入れたものに、つぎの見解がある、「倫理は歴史的現實の行爲的自覺に外ならない。具體的現實の頂點をなすものは國家であり、しかもそれは最高道德の實現體である。我々はそこに存在と當爲、事實と規範との綜合を見る。日本の國體思想によつて純化せられ、否定即肯定、現實即絶対を説く日本の大乘佛敎は、實踐性と科學性とを内に包むものとして新しき時代の建設原理たり得るものの一つであろう。」「(2)「事實主義の立場より見れば、事實とは普遍的な理の類例としてではなく、寧ろより根源的に理をかくあらしむる根據とさえ考えられる。」「(297)

城戸幡太郎らの「教育研究會」及び岩波書店「教育」

編集部彈壓。高倉テル「箱根用水の話」(公)<sup>(中)</sup>。コミンテルン解散。

六月。學徒動員體制確立要綱發表。言論報國會は日本世界觀委員會と思想對策委員會設置。立命館大學(中川總長)各大學に率先して「國體學研究所」設立。曹洞宗堂林長會議、「吾等ハ皇道ノ大義ニ則リ、禪法ヲ昂揚シ、皇國民ノ鍊成ニ精進シテ、一億一心聖戰目的ノ完遂ニ挺身セシムコトヲ期ス」と宣言。「興亞宗教會議」、陸軍報道部堀田中佐講演。「宗教世界宣言」發表。佛教代表團部宗城、神道代表千家尊建、回教代表モハメッド・アミン。大日本基督新教協會設立。「本會は基督新教を通して日本精神を全世界に宣揚徹底するを目的とす。」「大東亞觀音讚仰會」(會長・子爵小笠原長生中將、幹部、大森亮願僧正、鹽入亮忠教授ら)大東亞諸民族の親善提携のため、この地域に觀音靈場を建立すること決定。「前便にてお送りしましたもの、御一覽願います。明日の聲明にどれだけ影響するか、果してどれだけ取入れられるかが心細いが：私は何とかして日本精神に世界性のある様に解したいと思うのですが：西晋一郎君の我國の「世界開闢即肇國」というパンフレットなきか、若しあらば一寸お見せ下され間敷や。(西田、堀)(維孝あて)「東條の演説には失望いたしました。あれでは私の理念が少しも理解せられていな

いとおもいます。唯珍らしくも、陸軍が私などの考を求めたことで御座います。」(同、和)(辻あて)高坂正顯「思想戰の形而上學的根據」(公)<sup>(中)</sup>。

七月。東京都制實施。大日本出版報國團結成。中村武羅夫ら文學者三十餘名、ミソギ鍊成會に参加。日本共產黨代表延安に入る。大東亞佛教青年大會。大會々長安藤正純。「私ニ背キテ公ニ向フ」臣道こそ佛教無我の原理の實踐に外ならぬ、という趣旨の「大東亞佛教青年の使命」發表。翼贊會北海道支部、北海道廳、北海道佛教會連携、「國體教學研究會」發足。講演「決戰下に處する教家奉公の道」(稻津)(紀三)など、第一日は「國體の本義」を中心として、稻津講師との質疑應答。また神官指導による「神拜行事」「やまとばたらき」の行事訓練。北海道基督者淺見仙作(七十)反戰思想の故に檢擧投獄。「七月十一日。陰晴定らず。午睡中凌霜子來訪。白砂糖を贈らる。晚間共に出でて金兵衛に飯す。洗方の女の話を、子供をつれし女乞食夕方料理場の戸口に來り、五十錢札二三枚出し、殘飯が御座いましたら賣つて下さい。何處の芥箱をさがしても、食べるものが有りません。親子とも三日ばかり何もたべずに居ますと言いたる由。近處にも野良犬一匹も居らずと云。」(荷風)(日曆)三井甲之「西田哲學に就いて警戒すべき點」(讀書)(紀平正美「無概念の弄び」(上)(同)



佐藤通次「見るものから聴くものへ」(同上)。「私などにも此頃例の偏狭な日本主義者のために、攻撃の焦點となつて居ります。誠に深く大きく國家の爲を思はば、尙少し眞に永遠なるものを念とすべきだと存じます。」

(西田、熊野) 金山穆韶・柳田讓十郎「日本眞言の哲學」。

(義孝あて) 連合軍シチリア上陸。ムツソリーニ首相辭任、パドリオ組閣、ファシスタ黨解散。「白薔薇」のアレクサンダー・シュモレルら處刑。チャンドラ・ボース、印度獨立連盟樹立(十月、自由印)。

八月。ビルマ獨立、米英に宣戰(パー・モ)。大東亞文學者決戰會議、議題「決戰精神昂揚・米英文化擊滅・共榮圈文化確立・その理念と實踐方法」。内閣情報局主催、大日本言論報國會思想戰委員會の日本世界觀委員會において、國學院大學教授松永村氏國民信仰の問題をとりあげ、思想戰の根本は國民信仰の歸一にありとし、英靈公葬方式の神道による統一を力説。皇典研究所および神祇會の進言により、全國師範學校に皇典研究所主催、課外神祇講座を置くこと決定、十月岩手師範から始めることになつた。「家々穴を掘る」。(荷風)「悟の境地」はいう「鮎川義介という人が『腹でやれ』と云つたが、いゝことじやと思う。よく頭が良い悪いと云う、最近では心臓が強いと云うが、それを腹までおろさねばいかん、とこ

ろがどうもこの腹をおろそかにする…殊に官吏、役所の人達は腹藝を打つてくれぬと物事がこたわつてしまふ。腹でやり、いけなければ腹を切るという覺悟がなければならぬ…腹でやれ、そして腹を切れ、と柄は云いたい。」「君も一つ死んで、これがよくもあしくも、私が生命の書だ」と云つて神の前に出すものを、お書きなさい。」(西田、柳田)「世界觀と國家觀」拜受いたしました：私共も、御論文の様に考えなければならぬ、とおもひ居ります。(西田、西谷) (啓治あて)

「眞宗の護國性」は云う、天皇の神聖性の根據は、天照大御神の神聖性と血縁的につながることにあり、大御神の神聖性は、和辻哲郎氏が云われるように、神聖なる無すなわち絶対無にある。(107—114・120)神道は肯定的人生觀と連續的世界觀に立ち、宗教とくに眞宗は肯定的人生觀と非連續的世界觀に立つ。したがつて神道は嚴密には宗教ではない。宗教でないゆえに價值が低いのではなく、むしろ國民道德として一切の宗教の上に位する。眞宗は否定性、罪惡觀に立つが、それは單なる否定ではない。穢土といひ世間虚假というても、それは日本の國體についてのことではなく、末法というも彌榮の國運を疑つてのことではない。「事實はむしろ逆であつて、神の末流としての日本人の神性を自覺すればこそ、その自己の神

聖にもかかわらず、日本人らしからぬ自己の現状を恥じ、ここに罪惡生死の凡夫という反省が生れるのである。神國としての國體を自覺すればこそ、その國體に照して、自己の形成しつつかある社會の醜さを反省せしめられ、ここにいよいよ穢土の感知を與えられる。また彌榮の國運を信すればこそ、その國運を扶翼することの弱き自己の現状に照して、ますます末法の内觀を與えられる。」(199—200) 親鸞聖人は絶對他力の境地を「自然法爾」とよばれたが、これこそ親鸞の到達した「日本的性格の全現せる宗教」である。(157) 自然法爾とは、「神ながら言あげせぬ」世界である。「われ」を忘れて本願に歸依し奉るという絶對無我の感情は、小さな個人の功利を離れて、大君の御前に承詔必謹する、臣民道の神髓に通うものであつて、ここに「神ながらの道」のさながらなる開顯を發見し得る：ここに日本國家と一枚となつた宗教のあるべき理想の形態が、具現されたと云い得るのである。(158) 「世界觀と國家觀」(東福)によれば、今日一部の進歩思想家の中には、諸國家は將來その國境による對立を解消して世界社會となるべきだとの説をなすものがあるが、これは米英の資本主義およびロシアの共產主義を生んだ近代西歐思想に外ならず、これでは聖戰を完遂して共榮圈と世界新秩序を建設できないばかりか、「天

壤無窮の御神勅を始め御歴代の聖詔を無視」する恐れがあると云う。

帝都に郷將官懇談會、米英謀略擊碎、樞軸思想戰必勝を強調。文部省吉田宗務課長、重大時局に際し、各宗管長は教化の陣頭に立て、と談話發表。「教學新聞」時論において西田哲學および京都學派に對する攻撃開始。伊藤證信「萬教統一の大中心としての皇國體」(中外)

九月。連合軍イタリヤ本土上陸、バドリオ政府無條件降伏、北イタリヤにムツソリーニ首班政府成立。女子の動員強化。文科系學生の徵兵猶豫を停止。すべての出版物の事前檢閲強化。東方同志會の倒閣容疑事件。「九月廿九日。くもりて暗し。…洋品店呉服店多く戸を閉し、一見荒廢の狀、國既に滅びしが如し。」(荷風) 山田孝雄「神國日本の使命と國民の覺悟」(中央)。稻津紀三「皇國祭・皇國教の確立」(中外) 國體信仰を唱導。

千葉耕堂、中野晴介、奈良任教三氏「皇道佛教學會」(假)の創立を、曉烏敏、伊藤證信、稻津紀三、今成覺禪、石堂毅、井上一次、小野清一郎、大村桂巖、奥田慈應、椎尾辨匡、高佐貫長、圭室諦成、寺田彌吉、中島今朝吾、中根環堂、中村辨康、西義雄、林屋友次郎、古川惟悟、堀一郎、堀内良平、山岡瑞圓の廿氏によびかけた、趣旨「…我國體祭祀の對象と佛教本尊との關係、乃至は神佛

觀念の異同、それ等の點に於て、私共在來の佛敎々學とわが惟神の大道との間に割り切れぬ多くのものを感じるのであります。而してそれ等は一部佛敎々學が未だに皇道化されてないためであつて、ここにこそ今日の佛敎々學の革新さるべき第一義が存し」。眞言報國勤勞奉仕隊一カ寺延人員六〇人を目標に全國に結成着手。大政翼賛會、政府に、文部省敎學局を皇道局と改め、學生、生徒に皇道敎育を普及徹底せしめること、大學、高專の諸講座を皇道の見地から再點檢し、敎授に注意を與えること、「家」中心の道德敎育の強化、現行の法律全般を再檢討し、これを皇道化すること等を上申。東本願寺各別院に「正法顯揚護國會」結成。大谷光暢法主、鮮滿、北支巡錫に出發。華北政務委員會、華北主要各地に宗敎刷新運動、講師、高神覺昇、濱田本悠、長谷川良信。四王天中將、ムツソリーニ政府を倒したものは、ユダヤ人祕密結社であり、今後その魔手は獨逸、日本にも及ぶであろうと警告。九段軍人會館において、日本佛敎讚仰會主催、全國佛敎學徒航空學生壯行大會、文部省吉田宗敎課長等祝辭。東西本願寺協同「敎化協議會」設置。西本願寺協力會議において、龍大、谷大合同案採擇。

モスクワにおいて、革命後最初の司敎會議會催、ソ連の戦争遂行への協力を、世界の基督教徒に要請する聲明

發表。モスクワ放送、全ソ連の正敎徒に對し、對獨戰に努力を傾注せよと訴え。

「恩一元論の來難」(佐々木憲徳)の長論文は自著「恩一元論」(出)の書評に答えたものであるが、内容はこの筆者の諸著にみられる論理の反復にすぎない。この書評は「恩一元論を讀みて、佐々木憲徳氏に質す」(教學新、筆者は角張月峰。「佛徒が佛徒たる氣魄を、全然喪失したのでは、大法の護持は思いも寄りぬこと…時の流れや、社會の推移に眩惑し…きよときよとして居る醜體は何事なるぞ…日蓮の立正安國、榮西の興禪護國、それは世間の解する意味とは雲泥の差である。大法を、正法を他の方便にするという意味ではありませんまい…今日佛敎の不振の根本原因は、徳川幕府と馴れ合うたことに存する。宗敎における第一の禁物は、賣らんかなの迎合的態度である。佛敎は自分の佛法であり、私一人で喜ぶ佛法であるから、他に賣り込む必要は毛頭ない。…佛敎は、「因外道」の一種となる。恩という一因から萬差の諸法の發生する道理はあり得ない…」

「思想戰の重大化」(教學新聞)は、言論界における民主的進歩派の謀略を排去する必要を力説し、「彼等は今日の嚴しき民族的思想檢討の前に晒されるや、急遽、左顧右眈して、和」を説き、「國內敵を求めると抗議し

て、以て自らをその検討と清算とから回避せしめる思想戦術を採る。これが日本の舊き思想派の現状である。」と評している。

拙稿「鬪戰經の哲學」<sup>(6)</sup>はいう、「兵家大江家に傳えられ、夙にわが海軍兵學校に讀まれて、『海の葉隠』として尊重されている兵書『鬪戰經』は、かの『葉隠論語』の百分の一にも満たぬ短章であるが、その作述の由來は明かでない……これによつてもわかるように、『鬪戰經』一卷は、兵法戰術の書であるよりも、戦いの哲學もしくは戦いの倫理として、日本的戰鬪精神の眞髓を示そうとするのである。劈頭に曰く、『我が武は天地に在りて初む。而して一氣に天地を兩にす。雛の卵を割るが如し。故に我が道は萬物の根源にして、百家の權輿なり。』<sup>(7)</sup>（原文）……その神話的形而上的な匂いにも拘らず、實質は政治的歴史的世界の形成に關する消息である。……武は政治的世界の形成原理と見られる。神武天皇の御東征は、日本肇國の地固めであつた。これによつて新秩序創造のための障礙が克服され、いわば武、刑、政、禮、樂の次第によつて、歴史的世界の萬象が現實的な意義と部署と組織とを與えられる。そこに天地位し萬物育すという趣きがある。こう考えるならば、武を以て萬物の根源、百家の權輿（おこり）なりとする見解は、荒唐的ではない。

しかし、ここに行使せられる武が、その公的な装いにも拘らず、實質は私的な暴力であるとすれば、それは歴史的存在を組織し化育する所以の、根源的武ではない。萬物の根源、百家の權輿としての武は、組織的教化の力としての文を、内に含むものでなければならぬ。兆民をしてその堵に安んぜしむとか、萬邦をしてその處を得しむとかいふ底の、人倫的政治的構想實現のための、眞にやむを得ざる非常手段としての、内面的必然によるもの。いわば『雛の卵を割るが如き』ものでなければならぬ。鬪戰經はこれを『眞銳』<sup>(8)</sup>と云う。『眞銳』とは、殺人刀の知と勇とが活人劍の仁愛に貫ぬかれた如きものである。ここに武の道義がある。この道義を失うならば、その殘虐、野獸にも愧ずべきであり、徒らに四方の怨嗟をかきたてることにより、劍によつて立つものは劍によつて亡びる、ということにもなる。……いわゆる天地を動かし、鬼神を哭かしむる底のものは、かたき徳であるよりも、むしろしなやかなる徳である。單騎川中島に信玄を襲うた上杉謙信の面目は、信玄の計報に覺えず箸を落して嗟嘆したところにも、看取されなくてはならない。あなたは支那へ渡つて、何を得てきたかと尋ねられて、別にこれというものもないが、強いて言えば、『柔軟心』<sup>(9)</sup>である、と道元禪師は答えられた。『柔よく剛を制す』とい

えば、處世的策謀を含むようであるが、眞に柔軟な心は、自然の理に隨順し、人倫の法に歸一するものでなければならぬ。これを「まこと」という。まことは策謀を排斥する。經に曰く「儒術は謀略に逃げて死し、貞婦石となるを見る。未だ謀士の骨を残すを見ず。」海の彼方に去りゆく良夫を見送つて、岩の上に布帛を振つた松浦佐用姫は、良夫の船が水平線に消え去つた後も、そこに立ちつくして布帛振る手をば休めず、ついに布帛振る姿そのままに化して石となつたという古い傳説は、あわれにも一途な女心のまことを、われわれに感銘させる。錦州城外斜陽に立つところ、謀略を絶した將軍のまことが、寂滅の微光を放つかと思われる。…「兵は詭道なり」と孫子は言う。詭も誑もあざむく、いつわるの義である。鬪戰經は詭誑を排斥する。目的のためには手段をえらばぬというのは、わが堂々たる正攻法の精神ではない、狐の狡智を以て犬を捕えるか。詭か鋭か、われは眞鋭を取らん、とこの經は言う。：

江戸初期の禪傑鈴木正三老人に、あるとき、あなたの法は義一つと承つて居りますが、どうすれば義を守ることができましようか、と尋ねた僧があつた。すると老人はハッタと僧をにらんで曰く「義と云うは、ぐつと死ぬること也。」とひとはしばしば決死について語る。

しかし、死ぬことよりも生きることが、遙かに困難であり嚴肅である場合はないか。「死ぬるがさほど珍らしいか」と劇作家近松は遊女たちに言わせている。仔細に點檢するならば、いわゆる「死の覺悟」なるものが、我愛と虚榮の燃焼物でない、誰が保證し得よう。死を恐れぬのは、また業が抜け切つていない證據だ、とも正三老人は語つている。そのような世界で死を覺悟することは、依然として謀略に逃げるものと云わねばならぬ。死もまた策謀性を含んでいる、「死際よきは曲者」と葉隠は説いている。プラトンがみずから四大徳目の一つに敷えた、勇氣もしくは剛毅をもつて、しかもこれを彼岸的叡智に照すならば、怯懦の一形態にすぎぬと教えていることは、興味深い。死を説き生を説くもの、必ずしも死生のまことを明らめたものではない。經に云う「死を説き生を説く、死と生とを辨ぜず、死を忘れ生を忘れ、而して死と生との地を説かん。」死生の地とは、死生の安んずる所か。安んじて死し安んじて生きる所以の消息か。…「生とも道わじ死とも道わじ」(道尙)というところに、死生の地を道得する消息がありはせぬか。正三老人が「ぐつと死ぬること也」というのは、世間的な死の覺悟をもその根源からくつがえして、眞實の悦樂、眞實の勇氣に至る根本體驗である。したがつて正三が「血氣の勇は何程強

しと云うとも、どこぞに臆病なる處有るべし。我も高き崖の上に立つて下を見れば、足振えて臆病出づる也」というのも、世俗的我愛の超克にかかる問題と見るべきである。單に崖の上で足ふるえぬというだけでは、街の曲藝師と區別がつかかねる。

このことから考えるならばただ：謀略の詮議に忙しい孫子兵法は、單に世間的な意味においても、ひとつの怯懦をはらむと見られる。曰く「孫子十三篇、懼字を免かれず」：故に曰く「用兵の神妙は、虚無に墮ちざるなり」人間の惨めさは、虚無と背中を接していることにある：どうしてこの虚無を乗り越えるか。ここに人生最深の課題がある。非常時の用心は、また平常時の用心でもある。經に曰く「先ず脚下の蛇を斷ち、而して山中の虎を制すべし」。(拙論か)  
(ら拔萃)

「七生報國の眞精神」はいう、七生報國に二つの安心がある。その小さい方は、自分が生死を超越し得る安心である：大安心というのは、英靈も我々現在生けるものも：千生萬生永久に皇國を護り得るという大安心：皇國のみが永久に八紘爲宇の天地の公道に基く正義を地上に示してゆく大安心：我が國の皇太子様として、お生れ下さるためには、その御過去に於て、富士山のように高大な御徳を、お積み下さったのである：それは實に千生

萬生の間に於て、忍びがたきを忍び、爲しがたきを爲し遂げ遊ばされて、お積みになつたことと、謹んで拜し奉る：その御高德に對し奉り、一死報國の程度では、とてもとても相濟み申さぬ。<sup>(m)</sup>「淮國教と宗教奉還」<sup>(千家)</sup>「宗團法の皇道化」<sup>(江口)</sup>「赤松晋明「鐵眼」<sup>(雄山)</sup>。西村伊作、不敬罪などにより起訴。

十月。日本、フィリピンの獨立承認。自由インド假政府成立。<sup>(m)</sup>イタリア、ドイツに宣戰。「白薔薇」ウィリイ・グラード處刑。モスクワ三國外相會議。官廳の疎開始まる。東方會中野正剛、軍部政治に反對し自殺。「皇道と基督教」、筆者文部省國民精神文化研究所員、利根川東洋氏、基督教の皇道化の必要を力説。<sup>(m)</sup>「私の軍務局長に話した要旨をかいたパンフレットをお目かけます。これは他の人が書いたので moderate なものです。陸軍でも首腦の人、相當分つて居る様です」<sup>(西田、鳥谷)</sup>「妓家はますます多くなりしが如く、稽古三味線の音頻にきこえ、浴衣に半帶だらしなき女の三々五々、町を歩めるさま、戰亂の世とは思われず、妓界の景氣甚盛なるを知らしむ。世の噂に、カフェーはやがて撲滅せらるべけれど、妓界は新橋赤坂の二箇所あるかぎり、ますます繁昌すべしとて、今は官吏軍人の墮落を怪しむ者もなくなりしが如し。世の中は、星に錨に關に顔、馬鹿な人達立

つて行列、とやらしい落首さえ口にするもの無きに至れり。」(荷風)  
(日曆)

十一月、タラワ、マキン島守備隊全滅。東京の疎開計畫決定。軍需省設置。大東亞會議、日本・東條、中國汪兆銘、タイ・ワンワイ・タヤコーン、滿州國・張景惠、比・ラウレル、ビルマ・バー・モー、自由印度假政府・チャンドラ・ボース、「大東亞宣言」發表。文化團體の勤勞報國隊結成。同志社創立者新島生誕百年記念祭、京都新聞會館において日本國民精神運動講演會、講師荒木貞夫大將「時局と日本精神」。西晋一郎歿。ローズベルト、チャーチル、蔣介石、テヘラン會談、カイロ宣言。

「善導教學の研究」によれば、「戰陣訓に、皇軍々紀の神髓は、畏くも大元帥陛下に對し奉る絶對隨順の崇高なる精神に存す、とある……それが沒我無私の境地であることは言う迄もない。この境地を純粹宗教的態度の表現たる絶對隨順を以て説明解説せる所以の、洵に意味深々たるを感ずるものである。殊にその話がもと、大無量壽經」等に出で、善導が好みて使用せるところなるを思うとき、そこに善導思想、善導教學の日本教學に連繫する有力なる通路を發明せるが如き、感想を懐かしめらるるのである」一禪匠によれば「勝たねば生きて還らず、この外に日本の精華なく日本の經典なし。衲は聲を大にし

一億國民に訴う、決戦下須らく國民は日本の精華を能く守り、日本の經典を體讀すべし。この精華を守り、この經典を體讀すれば斷じて快勝すと。」(市川註、「經典」とを討つ……勝たずば生きて歸らじと……の軍歌のこと)

十二月、マーシャル沖空戦。オーエン・ラティモア、情報部太平洋作戦部長となる(一四四年)。都市疎開計畫要綱發表。徴兵年齢一年引下げ(十九歳に)。「人生二十年」という言葉流行。第一次學徒出陣。「一度兵營に入つてしまえばそれ迄だろう。何も考えないであろう。それが一番幸福なのかも知れない。然し人間は、考える輩ではなからうか。人間は考える能力は有しているが、それを解決する能力は、有つていないのだ。」米英樂曲約千曲を演奏禁止。北海道神祇中心生活確立委員會は、アツツ島玉碎將兵慰靈祭が、従來の慣例を破り神式で行われた機會に、「國體防護の戰士の英靈を祀る公葬は、神式にすべきである」と宣言。右翼の西田哲學攻撃盛んとなる。「田邊壽利君が來て、例の私の『世界新體制の原理』を、先ず『思想』に出してもちいたいと云う。いかがのものでしょうか。又有象無象を騒がすにしては、つまらぬと思う……金井氏など、どういう考にや。」(西田、谷川)「近頃の曉鳥の傾向には、あまり感服して居らぬもの故、あんな所に止まつていてはとおもひ、遂に爆發した。併し

若い人を迷わずに終つては、すまぬとおもう。あれはあれで自然に分るまで、曉鳥にやらせた方が、安全なのかも知れぬ。よく云つて置いて下さい。」(西田、畑) 中村辨康「日本淨土敎の國體思想」は、淨土敎を「翼贊の宗教」として、往生淨土の思想を全く新しい觀點から再検討すべきことを力説し、淨土の存在觀(存在觀は有の思想ゆゑ)を否定すべしと云い、阿彌陀の淨土は、わが國體と相似るし、「信」の心情は「忠」の心情に通ずる、と説いた。「十二月廿二日。世の噂をきくに、兵器工場にては職工のみ増加せしが、資材欠乏し、夜間仕事をなさざるが故、來年六月頃までには、戦争は終局に至るべし。若しまたそれより長引く時は、經濟的に自滅すべしと云」(荷風日曆)

この年、劉少奇(一八九八—)延安において、中央書記處書記、人民革命軍事委員會副主席となる。

Ortega y Gasset, Das Wesen des geschichtlichen Krisen., Geschichte als System.  
Heidegger, Vom Wesen der Wahrheit.

C.G. Jung, Über die Psychologie des Unbewussten.

Sartre, L' être et la néant.

Vercors, La marche à Pétole.

波多野精「時と永遠」。出隆「ギリシアの哲學と政治」(一)。

柳田國男「神道と民族學」。西田長男「神道史の研究」。齋藤响

「日本の世界觀」。磯部忠正「神話哲學」。和辻哲郎「尊皇思想とその傳統」。大川周明「大東亞秩序建設」。タカクラ・テル「ニッポン語」。井坂錦江「支那民族生活史」。平野義太郎「民族政治學の理論」。酒井鑄次「戦争類型史論」。橋田邦彦「我觀・正法眼藏」。白石虎月「續禪宗編年史」。

一九四四(一九)一月。自由印度假政府ビルマに移る。

延安の日本人反戰同盟、日本人解放連盟に改組(野坂參三)。

毛澤東、陝甘寧邊區勞動英雄模範工作者大會において、「兩三年以内に經濟工作に完全習熟せよ」と力説。緊急

國民・學徒勤勞動員方策、國民決戰生活要綱決定。女子挺身隊結成。國民學校合戰時特例公布。疎開命令發効。

「中央公論」「改造」編集者等檢舉(横濱事件)。拷問による

調書捏造。拷問により二名獄死。全被告は拷問によつて捏造された調書に捺印を押し、留置場から牢獄に移され、全員有罪の判決。(黒田秀俊「血ぬられた言論」、三枝重の、おそるべき拷問の) 雄「言論昭和史」にはこの事件前後證言が記されている。 「共存共榮、以和爲貴、王道

樂建土設の聖業」は、このような空氣のなかでおし進められた。

岡部文相を會長として、「宗教敎化方策委員會」發足。委員、町村警保局長、佐藤陸軍省軍務局長、岡海軍省軍務局長、池田司法省刑事局長、里見達雄氏など。「廢佛毀釋と佛敎の死活」(江部鴨村) 佛敎の皇道化を力説。「日本歴史の回顧



と傳統の佛敎——大東亞建設に鑑みて宗教國策を樹立せよ」  
 (正純) 安藤) はいう「原始文化の時代は敬神が道德の規範だ  
 が綜合文化の時代には敬神崇佛が日本道德の規範であ  
 る……これは……日本民族大多數の精神的事實である……此等  
 の現實が日本をここまで發展せしめたのだ……現實を無視  
 ……しては國家の經綸にはならない。」大東亞共榮圈の精  
 神的建設のためにも、國內の再建設のためにも、宗教活  
 用政策を樹立する要あり、そのための「日本佛敎大學」  
 の創設が急務である。思想國防強化のため「宗教々化方  
 策委員會」(官制) 發足、會長岡部文相、委員、村田情  
 報局次長、町村警保局長、佐藤陸軍々務局長、岡海軍々  
 務局長、池田刑事局長、近藤文部省教學局長、丸山鶴吉、  
 關精拙、金子大榮、安藤正純、下村壽一、宇野圓空、石  
 橋智信、大森亮順、岡田戒玉、谷口虎山、朝倉曉瑞、大  
 谷整潤、富田滿(キリスト敎) 里見達雄、木邊孝慈等。  
 松永村「國民生活の神道化」において、「日本化した佛  
 敎」の「反日本の異教性」を力説。宇野圓空「文化主義  
 を一掃せよ」、思想戰完遂のため、米英的文化主義を一  
 掃して、東亞的文化を建設せよと論ず。

日本基督教朝鮮監理敎團、ユダヤ思想排除の實施要項  
 發表、一、聖書に顯れたる猶太的思想を一切排除するた  
 め、聖書の正しき解釋本を制定し、此に依り信徒に教う

ること。二、皇民憲章を制定し、皇國古典及び國體本義  
 に關する精神を信徒に扶殖すること。三、禮拜堂敷地内  
 には神明奉安殿を鎮座し奉り、信徒の各家庭には神棚を  
 設置して、大麻を奉戴し、報本反始の誠を致さしむるこ  
 と、等。

荻須純道「夢窓・大燈」、西田幾多郎「物理の世界」  
 (思) 大串兎代夫「大詔の根本義」(中公)

二月。ドイツ軍東部戰線において全面敗退。米軍マー  
 シャル群島上陸。決戦非常措置要綱決定。中学生の勤勞  
 動員大綱決定。國民登録制、十二—六十歳に拡大適用。  
 「宗教々化方策委員會」第一回總會、「思想戰完遂」へ  
 の宗教動員の決意強調。朝鮮に徴兵制をしく。

拙論「澤菴和尚の論理と倫理」、時局に多少かかわり  
 のある部分をあげよう。澤菴はたえず「公」と「私」、  
 在家の論理・倫理と出家の論理・倫理との葛藤のなかで、  
 「困申候」「迷惑仕候」「無是非候」「つなぎ猿のように  
 迷惑致し」「よき事は一ツも無之候」と、逡巡し、途方  
 にくれ、悩んでいる。文字通りうけとられるような「任  
 運無礙」「轉轍々地」「歩々清風起る」「心の欲するところ  
 に従つて、矩を踰えず」とかいつた自在境は、そこには  
 なかった。「行かんと要すれども行き得ず、坐せんと  
 要すれども坐し得ぬ索漠が、ここに繰りひろげられてい

る。禪僧が却つて俗人の頓死を羨んでいるかに見られるではないか……そこで歸するところ、因果歴然之道理、人之トガに無御座候」という謙虚に身を置かざるを得ないのである。…澤菴和尚の場合はなにゆえの逡巡であつたか。われわれはさきに、崇傳和尚であつたならば、決して逡巡しなかつたであろう、と言つた。しかし寂室和尚や道元禪師であつたならば、またそれとは別の境涯において、逡巡しなかつたであろうと思われる。…そのような事態に入り込んで、そのように逡巡するということに、澤菴和尚の面目があつたと見るべきである。…

われわれはさきに、家光と澤菴との交渉において、私の問題が取扱われ、權力の問題が絡まり、更に眞俗の問題が關連することを見た。…およそ權力なるものは organised potential violence として、規定せられてよいと考えられるのであるが、それはかかる法的なるもの統制力實現のための、やむを得ざる手段として認容せらるべきである。しかしながら、眞實の公、眞實の法、眞實の權は、古來曉天の星よりも稀であり、むしろ偽公、偽法、偽權が公、法、權の擬態をとつて榮えたのである。霸者家光の道必ずしも公的ではなく、沙門澤菴の素願必ずしも私的ではなかつたと云える。偽公的なる存在が自らを清算し、眞に公共的なる眞諦が實現せられるところ

にこそ、佛土建設の倫理が存する。…

われわれはさきに權力を以て organised potential violence として規定したが、このものの現實的基體乃至實體と見らるべきものが、武力である。權力が有する統制力は樂、禮、政、刑の組織的段階を経て、武に至つてもなまなましい機能を發揮する。劍そのものは無記であるが、これを行使する主體の在り方については、その正邪が問題とならざるを得ない。…武の倫理に基礎づけられるのでなければ、劍の行使は愧ずべき狂暴にすぎぬ。そして劍の行使に眞の不退轉の勇氣を與えるものは、それを基礎づける武の倫理の嚴肅に對する歸一的自覺にはかならない。この自覺は權力の最深至純の精神である眞諦的公明性と、直ちに一なるものでなければならぬ。もしも劍道と禪とが結びつき得るとするならば、それはこのような倫理的自覺を媒介とするのでなければならぬ。劍禪が一體化し得る最も根源的な一着子は、これを外にしては在り得ないのであつて、單に、打太刀を見る事は見れども、そこに心をとめず、向うの打太刀の拍子に合せて、打とうとも思わず、思案分別を残さず、振上ぐる太刀を見るや否や、心を卒度止めず、其ま付入て向うの太刀にとりつかば、我をきらんとする刀を、我が方へもぎとりて、かえつて向うを切る刀となるべく候、

というところにのみあるのではない。しかも魔劍か正劍かを決するところの規準は、この道義性をほかにしてはあり得ない筈である。ゆえにもしこの一着子にして不分明であるならば、どれほどその試合が自由無碍であつたにせよ、それは魂を失つた魔的奔放にすぎぬであらう。禪は、どのような主權者の武力にも寄興し得る、といつた無限定無節操なものではない筈である。…

何事も一枚になり切れればそこに禪があるというのは、三昧主義とでも稱すべきひとつのはからいである。「無」は絶対の無限定なるが故に、却つて如何なる限定にも自由<sup>に</sup>轉じ得るのだとするならば、そしてかかる絶対無が禪なるものの無極の太極であるとすれば、そのよ<sup>うな</sup>荒涼たるもの、物騒なもの、無氣味なものを、劍客が、東洋精神が、人類そのものが根據とするということとは、戰慄すべき禍いである、といわねばならぬ。古來一部の心性觀が、その心性の説示にあたつて、その内證内感を全く捨象するとともに、かくして成立した表現上の消極性を、補い救ふ必要上、他面において、その積極的活動面を強調せざるを得ぬこととなり、このようにして結局消極的表現と積極的表現との同一、即ち虚にして通ぜざるなく、無にして作らざるなしという如き、全く形式的、抽象的な表現<sup>に</sup>諒解を定型化したがために、かの

老莊の必性觀と同じ混濁と危険を、孕むに至つたのではあるまいか。かかる表現<sup>に</sup>諒解に絡まる論理と倫理とを、洗い淨めることが、必要なのではあるまいか。」(澤庵禪究一)

三月。日軍インド侵入インパール作戦開始。決戦非常措置實施。農商省、市町村部落單位食糧増産班編成を通牒。文部省教學局、思想審議會設置。「婦人公論」休刊。

西田幾多郎「論理と數理」(想)。「あまり人が國體といふことをかけとすめる故、一寸「國體」といふものをかきました。併しこれは當分發表せず。」(西田、柳この論は金井章次に渡された)。「オペラ館樂屋頭取長澤氏の語るをきくに、今月三十一日にていよいよ解散します。役者の大半は、静岡の劇場へやる手筈です、との事なり。二階の踊子部屋に入りて見るに、踊子等はさして悲しめる様子もなく、いつもの如く雑談し居れり。凡そこの度開戦以來、現代民衆の心情ほど解し難きはなし。多年生活せし職業を奪われ徵集せらるるも、さして悲しまず、空襲近しと言われても、亦更に驚き騒がず。何事の起り來るも、唯なり行きにまかせて、寸毫の感激をも催すことなきが如し。彼等は唯電車の乗り降りに、必死となりて先を争うのみ」(荷風日曆)

(1) 註

西田は軍部・右翼の偏狭に反對し、天皇のもと普遍的な歴史形成の原理を、日本精神の根柢に礎立しようとした。拙論「絶対無のつまづき」(思想、昭三四・一)は、西田のこの部分を正當に評價していない。しかし、そのような普遍原理を、天皇制のもとで矛盾なしに確立できるかどうかは、依然として問題であろう。拙論「禪・華嚴・アナキズム」(自由思想、昭三六・五號)参照。西田は絶対矛盾の自己同一の論理を、般若即非の論理と同一視する場合(鈴木大拙宛書簡)がある。しかも西田の努力は、般若的な境界の論理を超越することにあつた、と私には思われる。これは貴重な遺産であり開拓である。西田の思想的制約は、かれ自ら「純學術的」な研究とよんだ、かれの「國家と國體」(哲學論文集第四補遺)に明らかである。

(2) 峯尾宗悦。なお前年十月號「大乘禪」は「この世界を天柱は、分別も分別なきの分別ながら分別でなし」と歌っている。分りましたか。打つて曰く、アイタタ。是れ分別か非分別か。また打つて曰く、アイタタ。這箇アイタタから一億一心も新體制も産れたのである。…日支關係も、日獨伊の間も、何も彼も正偏圓轉の妙、莊嚴佛土、即ち惟神の大道が實現するのだ。が、なお妄我の妄執を離れ得ない國家群に對しては、敢然として聖戰を續けねばならん。」という禪匠の「新體制と禪」をのせ、同十一月號は「これが國體または國性と申すのであります。性は不改を以て義とします。岩戸神

樂の大昔から、君上と臣下の分れた國が出来ました。何も理窟はいらぬ、何故かということはいらぬ。砂糖はなぜ甘い、というても、それは砂糖の性であるから、説明はできません。君臣の大道もその通りである。…これは動かすべからざる因果律…これを惟神の大道と申しまして…どうしても變易すべからざる眞理、即ち正因正果であります。」という別の禪匠の「忠魂を喚起せよ」をのせている。

(3) 「現代物理学は相補性原理によつて、佛敎の無我哲學を立證した」というのは問題であろう。武谷三男氏は、物理学そのものと物理学の解釋とを、嚴密に區別すべきことを力説したあとで、こう書いている。「この相補性原理は、相對性原理のように何ら原理といわれるような理論の展開に寄與するものではなく、量子力学の一つの解釋なのである…一番たち入つた解釋であるが、何ら論理というようなものではない。ところが、これが論理として量子力学から飛び出すとき、甚だ珍妙な事態をひきおこす云々。」(辨證法の問題、五五頁)

- (4) 大法輪、一月  
 (5) 同右、江部鴨村  
 (6) 栗林一石路「近代文學」昭二九・八月  
 (7) 大乘禪、二月、原田祖岳  
 (8) 中渡・壬生「信仰者の抵抗」、小笠原日堂「國神不敬事件の眞相」  
 (9) 中渡敦篤「宗教的民族主義の系譜」(日本宗教史講座・四)  
 (10) 東京軍事裁判記録(毎日新聞、昭二一・一〇・一九)

- (11) 世界轉換期としての現代、東亜と世界史、新日本の世界觀、國家と宗教、の諸論文と併せて昭一六・八月「世界觀と國家觀」として刊。當時の知識層に大きな影響を與えた。西田もこの論文に共鳴(本稿、昭一八・八月の項参照)。「多くの傑出したわが先人達のうちでは、佛教や儒教から汲まれた悟道の信念と、盡忠報國の精神とが、單に矛盾しないという、消極的な妥協に止まらずに、積極的に生々たる結合にまで發展し、國家は恒にそこから強大な精神的動力を得たのである。この事實は：絶えず著者を導く星となつた。」(序)「この機會に一言して置きたいのは：わが國體について闢説した部分を、或る既定のものに對する、一つの單なる讚歌のような意味に取られたくないということである。著者の意圖は寧ろ：それを理念にして事實、事實にして當爲というやうなものとして、見ることに存する。」(第三版序)の趣旨によるもの。
- (12) 「三、前號外交々涉に依り、十月上旬に至るも、尙我要求を貫徹し得る目途なき場合に於ては、直ちに對米(英蘭)開戰を決意す。」(平凡社、日本史料集成、五九一頁)
- (13) 近衛辭表奏上「：然るに最近に至り東條陸軍大臣は、右交渉は其所望時期までには到底成立の見込なしと判斷し：『帝國々策遂行要綱』中三の『我要求を貫徹し得る目途なき』場合と認め、今や對米開戰を用意すべき時機に到達せりと爲すに至れり：仰き願くば聖慮を垂れ給ひ、臣が重責を解き給わんことを、臣文膺誠惶誠恐謹みて奏す。」(平凡社、前掲書、五九二頁)
- (14) 岩波「倫理學」卷八所收「國家理由の問題」(九月)「『國家理由の問題』には三つのモチーフがある。一つは軍部を中心にした侵略的な大東亜聖戰イデオロギーに對して、世界史の形成作用という普遍主義から國家を理由づける、という西田の反軍部のモメント。二つは、この反軍部のコースで、田邊元が試みた、種の論理への批判のモメント。三つには、にも拘らず、國家そのものを合理化することによつて、聖戰を是認するモメント。」(山田宗睦、西田哲學の思想的運命の教訓)
- (15) 「祖國への愛と認識」所收。西田哲學に心酔したが、社會思想には北一輝、權藤成卿などの影響がみられる。昭七、野火止平林寺に參禪、見性。
- (16) 大乘禪、十月
- (17) 同、同
- (18) 大友抱璞
- (19) 尾崎に死刑の判決を下した裁判長高田正は判決後風見章に語つている「尾崎はまことにみあげた人物である。：ひとりの人間として非難するにたるおこないは、ちつともない。それほどばかりか、ただいぢずに、おのが信するところに、殉せんとする氣はくには、いにしへの志士仁人も、かくやとしのばれて、ただ、あたまがさがるおもいであつた」(風見章、尾崎君の思い出、「愛情はふる星のごとく」(上)二四七頁)
- (20) 伊藤康安
- (21) 椎尾辨臣
- (22) 三枝重雄「言論昭和史」一三四頁

- 23 中濃、前掲論文、二四〇—五〇頁
- 24 高見順「昭和文學盛衰史」卷二
- 25 米田勇「大東亞戦争下における基督教の彈壓」(思想、一九五九、二月)
- 26 東京市、疲勞勤士、大法輪、一月
- 27 同右號、澤木興道
- 28 毛澤東選集、卷五、參照
- 29 禪の生活、二月
- 30 大乘禪、三月、石黑法龍
- 31 Paul Tillich, "Storms of our Times," An address delivered at the Fiftieth Church Congress of the Protestant Episcopal Church, in Indianapolis on May 6, 1942. かれはこの講演を終るにあつて、(1)われわれは日本と戦つているのだが、それは民族戦争を、アジアにおけるヨーロッパ帝國主義を保衛するための戦いを戦つているのか、それとも、アジアを我々ヨーロッパからも解放するため戦つているのか。(2)われわれはロシアの側に立つているのだが、それは當座の間そうするのがわれわれにとつて有利だからであり、いずれはロシアを西歐問題から排除する意圖のもとに戦つているのか、それともヨーロッパおよびアジアの運命を、西歐諸國と同じ根拠において決定するロシアの権利をまじめに承認する意思をもつているのか。(3)われわれがヨーロッパで戦う場合、われわれは「アメリカの世紀」を實現するために、懲罰者・教育者・文化的經濟的征服者として、戦うのか。

- の三問をあげ、わたくしはこの三つの問いに對して、われわれが建設的な解答をもつことを願うのであり、もしもこの願いがみたされない場合には、"night will fall over us for generations."と結んでいる。
- 32 服部卓四郎「大東亞戦争全史」卷二、一六五—六頁
- 33 思想、米田論文(前掲)
- 34 35 大乘禪、七・八合併號
- 36 佐々木憲徳
- 37 改造、七月八月。陸軍報道部の壓迫により、九月情報局、七月・八月號發禁處分、つづいて泊事件(本文參照)
- 38 金科奉(一八九〇—一九四〇年重慶にあつて、朝鮮人民による抗日闘争指導中の彼は、延安に移り、延安政治學校校長となる。戦後「金日成大學」總長。彼の指導する獨立同盟は、二萬の盟員をもち、金亮らの義勇軍と表裏して、國際的提携を強めつつ、終戦時まで戦つた。
- 39 大法輪、七月、澤木興道
- 40 宗教研究、第六年・第二輯
- 41 金子大榮
- 42 眞理、七月
- 43 大法輪、八月、澤木興道
- 44 黒田秀俊「血ぬられた言論」、山田宗睦「現代思想史年表」
- 45 「近代の超克」、文學界九月・十月、これに參加諸氏の論文を加えて出版、サブタイトル「知的協力會議」
- 46 大法輪、十月

- (47) 禪學研究、三七號
- (64) 世界、一九六〇・五月、中國人強制連行の記録
- (49) 中島健藏「昭和時代」、一五四—一七三頁。東京軍裁記録、毎日、昭二一・九・二一
- (50) 同右、昭二一・一二・一一
- (61) 同、昭二一・九・一三
- (52) 知性、十二月
- (63) 中央公論社「世界史的立場と日本」に收む。思想の科學研究會「轉向」卷中、後藤宏行、總力戰の哲學。「現代の發見」卷一、山田宗睦、哲學の戦争體驗、參照
- (54) 大法輪、一月。井上の「皇室と宗教との關係」(明治二四)は、内村鑑三の「不敬事件」をとらえて、基督教排撃を主導したもので、當時の「教育家の大部分は、此論文を以てたかも金科玉條の如くみなし、盛に反基督の感情を焚したり。學校内の基督教徒迫害は始れり。學校教師は自ら公然基督教徒たるを白狀するあたわざるに至れり。」(山路愛山、「教育史論」)
- (55) 大友抱璞、本願寺情報課
- (56) 大法輪一月、山崎大耕
- (67) 大乘禪、二月
- (58) 善波周
- (59) 「轉向」卷上、魚津郁夫、ある自由主義左派の知識人
- (60) 倉田「日本神話への歸依」
- (61) 禪の生活、二月
- (62) 同、秦慧昭
- (63) 同、宮坂詰宗
- (64) 大乘禪、二月、石黑法龍
- (65) 同、三月、原田祖岳
- (66) 禪の生活、三月、山田靈林
- (67) 大乘禪、四月、峯尾宗悅
- (68) 中外日報、五・一二、大政翼贊會大阪市前參與、奥田慈應
- (69) 大法輪、五月、江部鴨村
- (70) 龍谷大學紀要、第一輯、大友抱璞
- (71) 東條の「大東亞宣言」の草稿となる筈であつたが、採用されず。全集、別卷一、日記。矢次一夫「昭和人物秘録」、上山春平、ブルジョア自由主義の思想(近代日本思想史講座、四) 山田宗睦、前掲論文。大宅壯一「西田幾多郎の敗北」は、西田は「魂を賣つて肉體の保證を求めた」と評す。大宅選集、卷一。長與善郎「西田幾多郎の悲劇」、毎日新聞、一九五九年六・一〇
- (72) 増永靈鳳「道元」
- (73) 大法輪、八月、關精拙、悟の境地
- (74) 普賢大圓
- (75) 教學新聞、八月四日
- (76) 大法輪、九月
- (77) 大乘禪、九月、石黑法龍
- (78) 中外日報、九・一
- (79) 同、九・二六以降

(80) 汪政權樹立、フィリピン獨立、自由印度假政府樹立等に關連して、戦後の今日、次の様な見解が相當廣く行われている。

「專制と隸從、壓迫と偏狹とを打破し、共存共榮の樂土を建設しようとして、命をかけて立ちあがつたわが國の行動は、確かに聖業であつた。その手段と方法をあやまつたがために、重大な過失を犯して失敗に終つてしまつたけれども、その當時隸從と壓迫とを強いられて、地球上にうごめきあへいでいた世界の諸民族を自覺させ、自由と獨立との世界を建設しようとする一大機運を作り上げ被隸從民族・被壓迫民族のすべてを獨立に導いた功績は人類文化史上に永久に輝いてゆく。」(伊藤林作「禪と自由人」一六四頁、昭三四・四)

しかしながら、專制と隸從、壓迫と偏狹のない樂土の建設は、まず足もとから始めるべきであつた。滿洲國建設はネオ・コロニアリズムの先驅であり、抗日救國の大衆運動をアジア各地によびました。アジア民族を「獨立に導いた」ものは、「新秩序建設」の意圖についての、アジア民族の認識と怒りとであつた。魯迅(一八八一—一九三六)は言う、「萬家塋面沒蒿萊。敢有歌吟動地哀。心事浩茫連廣宇。于無聲處聽驚雷」(萬家面にイレズミして蒿萊に沒す。敢て歌吟の地を動かして哀しむあらんや。心事浩茫として廣宇に連なり、聲なき處において驚雷を聴く。)治安維持法「改正」提案理由の中に「民族獨立等各種の詭激運動に適用する必要」(昭一六・法相柳川中將)ビルマでは三月二十八日を「抗日記念日」として、毎年記念行事をおこなつている。

- 一九六一年九月六日カンボジア元首ノロドム・シヤヌーク殿下は、毎日新聞社、カンボジア大使館共催の講演會で云う、「一九四五年三月九日、日本軍がフランスを驅逐したあと、日本軍はカンボジアの解放を宣言、カンボジア王(當時私がそうだつた)が王國の完全獨立を宣言した。これは總てのカンボジア人を熱狂させたが、不幸にして幾つかの事情がこれを冷やしてしまつた。私達はすぐ所謂大東亜共榮圈に包含されたからで、この共榮圈は、わが國の民衆にとつては、貧困、制約、義務の連續に變つた。」(毎日、九月七日)ヴェトナム民主共和國憲法(一九五九年)前文は、こう、Throughout more than eighty years of French colonial rule and five years of occupation by the Japanese fascists, the Vietnamese people...struggled against...to liberate their country. 日本のカンボジア占領時代のカイライ首相ソン・ヌゴク・タンは、一九五八年アメリカの支援のもとに、南ヴェトナムからカンボジアに侵入し、中立政權を倒そうとして失敗した。いまアメリカの支援をうけた「臺灣獨立運動」が、米・日・臺を根據に動いていることが注目される。(陳焜旺、臺灣をめぐる諸問題、「思想」一九六一・一一號)
- (81) 中外日報、一〇・三一以降
- (82) 大原性實「善導教學の研究」
- (83) 大乘禪、十一月、菅原時保
- (84) 「きけわたつみのこえ」、一三九頁
- (85) 森伊佐雄「昭和に生きる」は、十九年五月末頃の、女子挺身



隊の狀況をかいている。徵用工場にかわいい女學生が、女子挺身隊として働いている。この女學生がまじめな顔をして、何か筆記しているの、からかつてちよつとのぞいてみると、

「花も嵐もふみこえて」と、流行歌を書いている。「これが、學徒勤勞報國隊の實態でございますか。」と、彼はノートのそばに走り書きました。すると女學生は、そのそばにまた「さようでございますが、いかなながら學徒の責任ではございません。」と書いた。

(86) 黒田「血ぬられた言論」

(87) 江部・安藤いずれも大法輪、一月

(88) 中外中報、一・一六―二一日

(89) 同、一・一八日

補註。梵鐘、佛具の供出が全国一斉に行われた頃(昭一七年)詩人野口米次郎はつぎの作を発表した。

梵鐘 應 召

野口米次郎

お前は嘗て、梵鐘よ、

朝日に滑つて田野に妙音を緋いた。

お前は嘗て谷間へ夜陰を縫つて恐び込み、

信仰を讃唱して、

道に彷徨う巡禮者に彼岸を教えた。

お前は嘗て幾千年の遠い昔の法を説いた、お前は嘗て沈黙を破つて、

都の遊戯が終つたことを叫んだ時、

私共は思いに沈み、座を離れる歡喜を知つた。

梵鐘よ、お前の聲は嚴しかつた、

でも慈悲深かつた、

私共はお前が善知識の秘傳に觸れた、

そして極樂の美德を學んだ。

私共はお前に永劫の消息を讀んだ。

だが今お前は、梵鐘よ、

寺院の靜寂を捨てて樓門を下つた、

そして下界の雜音と争鬨に挺身した。

ああ、何という悲壯な心氣の一轉だ、

お前は永劫を傍らに置いて瞬間、

否な、現實に殉するに至つた、

お前は自己を抹殺して私共と苦痛を分けるに至つた。

梵鐘よ、お前は古い釋迦の法を捨てた、

後世の連鎖を切つた、

だがお前の決意に、否なお前の悲痛な現實に、

新しい信仰と歡喜がないと、ああ、誰が斷言しよう。

誰かお前の名残りの鳴動、

否な、應召の歡呼に、

殉國報恩の叫びを聞かないものがあるう。